HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	「日本という国」の容を歴史として問い質す ： 日本人・日本国民たる我の場とは
著者	大濱，徹也; OHAMA，Tetsuya
引用	北海学園大学人文論集(63)： 121-213
発行日	2017-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

「日本という国」の容を歴史として問い質す
── 日本人・日本国民たる我の場とは ──

大　濱　徹　也

はじめに ── 日本列島の歴史をどのように読みますか

おはようございます。三つの発題を聞きながら思ったのですが，「日本人」とは何なのでしょうか。日本列島の住民は，人種としての「日本人」なのか，日本に「国民国家」という枠組みができることで「国民」とされた「日本人」のことなのか。このことを考えたことがある？　列島の住民にしても，一元的に「日本人」とみなされたわけではなく，大和の王権，「倭国」の統治下に入らない「熊襲」「隼人」が九州に，東には「蝦夷」云々と呼ばれてきた者が存在していた。「熊襲」「隼人」等々の西日本は中央政府の統治下に組み込まれていく。

東日本の「蝦夷」は，天皇による征討で北方に追われていき，現在の「アイヌ」に代表される先住民としての存在を確かなものとしております。「アイヌ」にしても蝦夷地北海道に限られた存在ではなく，サハリンから樺太に広く散在しています。17 世紀の徳川王国には，松前藩を通して，沿海州から黒竜江にかけての北方との山丹交易が樺太を中継したアイヌを媒介に蝦夷地にもたらされておりました（松前口）。

この列島につらなる南西諸島には琉球王国があります。琉球は，独自の王権が統治する海洋国家として，清国との朝貢貿易による生糸・絹織物と台湾・タイ・ベトナム・ジャワなど東南アジアの国々と交易し独自な世界をつくっていました。いわば 17 世紀以後の鎖国日本は，薩摩藩を介し，琉球を媒介とする交易で東南アジアの物資（生糸〈黄糸〉・砂糖〈薬種〉・香料・鉛など）が日本にもたらされたのです（琉球口）。

ちなみに徳川王国は，海禁政策で対外交易を独占したがため，「鎖国」といわれました。徳川将軍家は，長崎・大坂・江戸を直轄支配することで内外の市場を独占，圧倒的な権力基盤の確立を可能にした。長崎ではオランダと清国との交易（長崎口），朝鮮からは清国との朝貢貿易で入手した生糸（白糸）と自国産の人参（薬種）が対馬藩を介して行われていました（対馬口）（信夫清三郎『江戸時代　鎖国の構造』1987年）。

なお日本が海禁を強化して鎖国といわれた状況がはじまる17世紀は，15世紀初頭の鄭和による大遠征（1405-33年）があり，ポルトガル，スペインの大航海時代が16世紀の世界を彩りました。そのなかで鄭和の遠征は各地に華僑を残しましたが，ポルトガル，スペインは原住民を制圧して黄金や香料を収奪しております。日本の16世紀，キリシタンの時代は，このような大航海時代のなかでルターにみられた宗教改革の波動を受けてのことです。

この大航海の波は，16世紀末から17世紀にかけて，明や朝鮮が海禁を強化し，ヨーロッパでは同じ言語や宗教がもたらす共同性から生まれる統治を求めて領土的に閉ざされた各民族のよる国家の形成がめざされております。徳川王国は，かかる時代の流れに位置付けてみたとき，自給自足的体制を確立することで厳しい海禁政策による鎖国を実現しえたのです。その鎖国は，海外渡航を禁止し，交易を四つの口に限定することで将軍家が情報を独占し，300年におよぶ「徳川の平和」を実現しました。

私たちは，このような列島の住民の在り方をみつめることなく，「日本人」だと言ってきたわけです。この「日本人」なる存在は，日本国籍をとり日本国民とみなされた者と同じではない。日本の国民には朝鮮の人も，中国の人も，インドの人もいる。人種と国民というのは難しい問題をはらんでいる，特に日本では。このことは，日本が植民地とした朝鮮半島の人々の存在，在日韓国朝鮮人をめぐる問題にみることができます。

しかし日本列島の住民，日本人の頭は，周りが海で大陸からへだてられた島国であるがため，列島が一元的にまとまった文化と歴史に規定された日本人という人種を何か特別な存在と想いみなし，「人種」的存在と「国民」

的存在を一体とみなすことで,「日本人」を特別視する想いが強いのではないでしょうか。国民と人種を区別して考えるよりも，一緒だと思いみなしている。その想いは，国民国家像でみると，強く日本民族の国家が「万世一系」の天皇の下にあるということを強調することに読みとれましょう。

国民国家には，フランスやイギリスのような Nation-state と多民族を包含したロシアやアメリカのような Union state があります。なかでも日本は，同じく後発の Nation-state でゲルマン神話による民族的個性を極度に強調するドイツ以上に,「民族国民国家」ともいえましょう。このことは，福澤諭吉が「日本には政府ありて国民（ネーション）なし」(『文明論之概略』）と指摘したように，nation を権力主体として国民国家を立ち上げたフランスと異なり，嘉永 6 年癸丑の衝撃をふまえ，国家統一を政治的に先行させ,「皇国」という物語が問いかける記憶を埋め込むことで「国民」を造型せねばならなかったからにほかなりません。

nation には民族なる含意があり，むしろ欧米ではそう解するのが一般的で，Nation-state が民族国家であるからこそ民族自決という言説が人口に膾炙しえたのです。しかし日本では，万世一系の皇統という神話を共有せしめるべく国体を過剰なまでに強調することでしか，国民国家の器となる民族の一体性を造型しえなかったのです。

たしかに福沢諭吉は,『文明論之概略』で「国体とは，一種族の人民相集て憂楽を共にし，他国人に対して自他の別を作り，自から互に視ること他国人を視るよりも厚くし，自から互に力を尽すこと他国人の為にするよりも勉め，一政府の下に居て自から支配し他の政府の制御を受るを好まず，禍福共に自から担当して独立する者を云ふなり。西洋の語に『ナショナリチ』と名るもの是なり」と説いており，この「ナショナリチ」を信仰にまでたかめることではじめて日本の nationality を確立しえたのです。かく過剰なまでに国体を信仰に託す言説こそは，日本における Nation-state をして,「民族国民国家」と位置づける所以です。

そういう意味で言うと，日本って何なのだろうかを考えなきゃならない

のね。いつから日本になったのか。さらに,「日本国民」というのは，いつ生まれたのか。私がこれから話そうとするのは，日本国民という存在がどういう形でつくられてきたのか。その日本国民をつくるためには,「日本の国」という物語がいるわけですが,「日本の国」という物語は，いつできたのか，ということです。

この課題は，敗戦によって生まれた戦後日本がそれに相応しnationalityを誕生させたのか，生み育てようとしたかということでもあります。戦後日本を生きる国民は共有する物語をつくれたのでしょうか。先ほど生徒さんが，戦後日本は憲法第9条を神格化していると言いましたが，確かにそうです。ある人たちは，憲法第9条で「戦争の放棄，軍備及び交戦権の否認」をかかげた日本国憲法を「平和憲法」として神格化しているのではないだろうか。その第9条を基にする戦後の日本は,敗戦をみつめるなかで,新しい日本という国の物語をつくれたのか。

明治維新で誕生した国家は，徳川王国を打倒することで,「神武復古」を掲げ，神武天皇に連なる天皇の下にある国家，万世一系の皇統の国である「皇国」という物語をつくることで，日本国民が「臣民」であるというnationalityを生み出したわけです。今日，話すのは,「国家」は国民という物語 ── 国民史を共有することで国家という存在を確かなものにできるわけで，それに相応しい「国民という物語」を造型する使命を負わされてきたのが歴史という物語なのだということです。そこでまず「日本という国」の物語はどのような歴史として説き聞かされてきたのか，描かれてきたかということから話をはじめます。

戦後の日本は,「敗戦」を「終戦」とかたることからはじまるわけで，歴史の教科書に1945年（昭和20）8月15日のポツダム宣言受諾による終戦を告げる詔書が大書されていますものの，9月2日の米艦ミズーリ号上における降伏文書調印の日に想い致しているでしょうか。昭和天皇は，2日後の9月4日，帝国議会開院式の勅語で「朕は終戦に伴ふ幾多の艱苦を克服し国体の精華を発揮して信義を世界に布き平和国家を確立して人類の文化に寄与せむことを冀ひ」，と戦後日本がめざすべき国家像を「平和国家」

だと宣言します。この「平和国家」は「国体の精華を発揮」する道だとみなされたのです。「平和国家」という言葉はこの勅語ではじめて使用されました。「平和国家」日本なる言説の誕生にほかなりません。

さらに翌46年の年頭「詔書」は，新たに再生する日本の原点を明治維新の時に提起した五箇条の誓文が説く世界に「民主主義国」日本の原点を見出し，ここに国家の存在の場を確保し，「終戦」を受けいれた天皇が「人間宣言」をすることで，戦後日本の方向性を提示したものです。「詔書」は，明治天皇が国是として下した「五箇条の誓文」を掲げ，「叡旨公明正大，又何をか加へん。朕は茲に誓を新にして国運を開かんと欲す。須らく此の御趣旨に則り，旧来の陋習を去り，民意を暢達し，官民挙げて平和主義に徹し，教養豊かに文化を築き，以て民生の向上を図り，新日本を建設すべし」と説き，敗戦で「焦躁に流れ，失意の淵に沈淪せんとする傾」きがある国民に「朕は爾等国民と共に在り」と語りかけます。「失意の淵に沈淪せん」とは，幣原喜重郎首相が詔書原案を英文で起草した際，17世紀の伝道者ジョン・バニアンの『天路歴程』第一部第一節をふまえ，“the Slough of Despond”と認めたのを日本語訳したものです。

> 朕と爾等国民との間の紐帯は，終始相互の信頼と敬愛とに依りて結ばれ，単なる神話と伝説とに依りて生ぜるものに非ず。天皇を以て現御神（あきつみかみ）とし，且日本国民を以て他の民族に優越せる民族にして，延て世界を支配すべき運命を有すとの架空なる観念に基くものに非ず。

この宣言は，戦後日本にとり，明治維新で語られた「天皇の国」という物語を受け継ぐ，迷うことなく継承していくことで戦後日本の在り方を定め，そこに紡ぎ出された「日本という物語」を戦後日本に相応しい物語として改鋳していくことが課題とされたことにほかなりません。この想いは，1946年1月22日の歌会始で，歌題「松上雪」によせて詠んだ天皇の歌に読みとることができます。

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしく人もかくあれ

この歌題「松上雪」は,「平和と苦難へ　畏き大御心」と紹介されていますように，占領下を生きる国民へのメッセージを托したものです。昭和天皇は，こうした敗戦占領下にある日本の国民によせる思いを1947年には

冬枯のさびしき庭の松ひと木色かへぬをぞかがみとはせむ
潮風のあらきにたふる浜松のををしきさまにならへ人々

とも詠んでいます(『おほうなばら　昭和天皇御製集』1990年)。ここには，厳しい冬の風雪や荒き潮風に耐える松のように雄々しくありたいと,「皇国」日本の民によせる思いが表白されています

敗戦という現実を凝視する昭和天皇の脳裡には，663年の白村江敗戦を受けとめた天智天皇があり，大陸の国家原理を学ぶことで律令国家日本を構築していく天武天皇にはじまる治世があったのではないでしょうか。ここには，白村江の敗戦により唐帝国の制度文物を受容して「大君を神と」詠いあげる律令国家を形成していったように，アメリカデモクラシーを五箇条の誓文に表明された世界に通じるものとみなし，この「誓文」を「日本の民主主義」の原点に位置づけることで戦後国家を建設するのだという強き思いが読みとれます。

戦後日本の物語はかかる天皇の歌に封じ込められた世界からはじまったのです。この「ふりつもるみ雪」は，民族の心を高らかに奏でた歌とみなされ，2002年（平成14）2月に小泉首相が施政方針演説でふれ，サンフランシスコ講和条約が発効して61年目にあたる2013年4月28日に天皇・皇后を迎えて開催された「主権回復・国際社会復帰を記念する式典」で安倍首相も引用しました。

このような国家の営みに違和感を持つ人たちは,「天皇の国」という物語に対峙しうる敗戦日本という場から戦後日本が問われる物語を提示したのか，それに相応しい物語を日本の歴史としてつくれたのでしょうか，そん

な問題を話そうと思います。

そこでまず聞きたいのは，最近よく耳にしない？　「美しい国，日本を守ろう」って。私のところには，しばしば神社庁からいろんなものが来るのですが，みんな書いているのだよね，「美しい日本を守るために」とか，「安倍総理とともに日本再生を。美しい国，日本を」って。「美しい国，日本」といったら，どんな日本を想像する？　どう？

何？　優しい国民。じゃあ優しい国民って何かな。思いやりがある？　うーん……。何に，誰を思いやるのかな，日本は「外国人」をはじめ，アジアから逃れてくる「難民」に「優しい」国だろうか。

安倍総理は，何かというと「美しい国，にっぽん」って言うのだよね。あなたたちは「にっぽん」って言う？　「にほん」って言う？

「にっぽん」のほうが力強い，そう。「にほん」の方が自然……。

それでは郵便切手に何て書いてある？　「NIPPON」，「にっぽん」という読み方をしている。この読み方は何時からなったのかな？　今日は「日本」をめぐる呼称をはじめ，当たり前のように日常的にかわされている「天皇」とか「天皇制」等々の用語がどのようにして日常化されたのか，ということをひとつの手掛かりにして，日本という「国家の物語」が歴史としてどのようにして創作され，語られてきたかという問題を考えることとします。

皆さん，日本の民主主義とか，信教の自由が話題となると，何かというと「天皇制」云々って言い，その在り方を論難するよね。じゃあ，その天皇制，あなたの語る「天皇制」って何？　と問われたら答えられるかな。自分の言葉で。

私は歴史を学んできましたが，日常卑近に常識のように何かと言うと「天皇制」とか「天皇制絶対主義」とかという言説に強い違和感を持っているのね。なぜかって言うと，「天皇制」だとか，「絶対主義天皇制」だとか言うけれど，何一つわたしの言葉としての説明がないまま独り歩きしている

のよ,そこには。「天皇制」と言われると,みんなわかっちゃった気分になっている。そこのところをわたしの言葉で説いていくことが，歴史を読み解く上で大事だと思っています。

日本のキリスト者が描く歴史像は「絶対主義天皇制」「神権的天皇制」の下でいかにキリスト教が迫害されたかという物語，天皇の強権的支配を強調することで，天皇という存在に対峙してきたキリスト者の受難史となっている。しかし，この学園を創立した鈴木弼美にしても，学園を支援した戦後の東京大学総長南原繁，矢内原忠雄等の内村鑑三から信仰を学んだ人びとにしても，天皇とか皇室に対する違和感はなく，その存在に意味を見出していた。このような天皇に寄せる言説を解析していかないと，天皇とか天皇制なる言葉で語られてきた世界の闇ともいうべき問題の本質にたどりつけないと思う。

2　歴史を読み解く作法 ── 日常性を場として

ここに問われるのは，歴史はどういうふうに読み解いていけばいいのかという問題です。近代とは何だろう。近代化として説かれる構図は，概念的な話でいうと，文明という鋳型でそれぞれの文化，暮らし・生活のかたちとか習いごと，習慣慣習である世界，文化が秘めている毒を消す営み。「文明」という普遍的価値を大義に掲げ，文化が築いてきた個別的な営みを無化し,「文明」という枠組で個別的な文化を再編成していくのが近代化をめざす国家の使命となる。ここに提示される国民国家は，各地域に根ざした郷党意識・愛郷心といわれるパトリオティズム（patriotism）を改鋳し，国家への愛情を育てるナショナリズム（nationalism）に昇華しなければならない。そのため国民国家の成立は国家と民衆の相克確執に彩られた歴史となります。

歴史を読むときに求められるのは，国家の目線，普遍的価値を自明とする場に身を置くのか，民衆の日常的営みが生み育てた世界，普通の日常的生活の場から国家・民族の在り方を問い質す目かということです。その目

は，私流に言えば「勝手口の目」ともいうべきもので個別な生活の場をよりどころにするのか，国家とか民族という普遍的な世界に依拠して己の居場所を考えて行くのかということでもあります。いわば，生活・暮らしの場から歴史を読むのと，国家・天下とか，世界情勢だとかという枠組みから歴史を読むのとでは違ってくる。

私は，日常卑近な暮らしの場に生きようとした人間の目，「勝手口の目」ともいうべき民衆の場から描かれる小さな歴史，小さな物語としての歴史を描こうと思っている。多くの歴史は，世界史的枠組とか，資本主義とか帝国主義体制等々に引き寄せた大きな物語のなかにおとしこんで歴史を語ろうとする。この大きな歴史というのは，帝国主義の体制という大きな枠組みに当てはめて，日本なら日本を位置づける作法で歴史という物語を問いかける。まさに教科書などが描く「歴史」はこのような世界です。だから，皆さんが暮らしているこの山形県の山村小国から，さらに米沢藩なり，山形県なりという場から歴史を問い質した世界と日本という大きな枠組から歴史を見たらどうなるかを考えてみたことがありますか。そこには日本史の教科書とは全く違う世界，物語が出てくるのではないだろうか。

日本の歴史教科書は，ヤマトにはじまる王権が平城京から平安京となり，やがて武士の手で鎌倉，さらに江戸へと権力の所在が移っていくというように描かれており，ミヤコの文化が地方に伝播していくという話になっているよね。この小国の地がある東北は，京（ミヤコ）の文化から遠く離れた地として，未開野蛮な文化の果てた地とみなされているのでは。ミヤコ── 京の統治下に入ることがミヤコの文化が伝播し，野蛮から文明へとして描かれているのでは，ないですか。

このような文化伝播史観ともいうべき歴史像は，中央の権力が列島全体に及んでくることが歴史の発展だとみなすもので，19 世紀に開国した日本が学んだ歴史像，ヨーロッパの文明史という枠組みで日本列島の歴史を読み解こうとしたものにほかなりません。その歴史像は，いわばヨーロッパの文明が世界を席巻していくという，その構図の中に日本の歴史を当て嵌めて描かれた世界なのです。

このような物語が日本の歴史だろうか。そうじゃないですよ，ここ小国なら小国，米沢藩なら米沢藩，南部藩なら南部藩，にはそれなりの固有の文化があり，ヤマト，ミヤコとは違う歴史があるのは当然のことではないですか。このような想い，この視点から私は学生たちに歴史学を問いかけてきました（大濱『講談日本通史』2005年）。日本列島史は，亜寒帯の北海道から見た歴史と，亜熱帯の沖縄から見た日本列島の歴史とは違うのだ，と。このような作法で歴史を問い質すことは，生活の場から歴史を読み解く小さな物語を書くことにほかならず，国家・民族の場に生活の営みを位置づけていく，大きな物語として歴史を語ることではないのです。

日本列島は，古くより大八州（おおやしま）と呼ばれてきましたように，千島，日本，琉球の島々からなる弧状列島で，その姿がつまり花綵（はなづな）に似ていることより花綵（かさい）列島だとも言われています。内村鑑三は，このような列島の容姿を，「日本の地理とその天職」(『地理学考』1894年，『地人論』として1897年に再刊）で，日本列島が「蜻蜓洲（あきつしま)」と呼ばれていることにふれ，蜻蜓（あきつ）はトンボのことで，能登半島がトンボの頭，腹と尾は伊豆半島，右の翅は東北から北海道，左の翅が関西から西南地域だ，と。

> 其南北に長くして東西に狭く，中央に太くして両端に尖縮するの状，渠の脈翅虫に類似する処あるが故に若か称せしならん。其頭部は能登半島とせんか，其背部隆起する所を甲，信の高地とせんか，其腹と尾とは伊豆半島にして大島八丈として海に尽る所とせん，其右翼は東北三道并びに北海道にして，其左翼は関西西南の地と見做さん，その後翅後縁に刻入のあるは東海の浜に屈曲港湾多きを示さんか，翅脈に縦横あるは我国山脈の方向を示すが如し，前後両翅の分るゝ所は西南に内海，東北に青森湾のあるが如し，余は実に蜻蜓洲の名を愛するなり，吾人の祖先は卓見なりし，彼等は能く脈翅虫類の構造を極め，帝国地形の概略を示せり，吾人開明に進める彼等の子孫は此詩歌的の名称を廃すべからざるなり。

さらに内村は日本列島の容姿を天女の姿としても問い語っています。

> 若し日本国を天女に擬せんか，窈窕たる彼女の仙姿は大陸に背し大洋に面し，高麗半島の尽きる辺より加察加（カムサツカ）の南角に至る迄大洋面を掩ふが如し，彼女は頭を北海に擡げ，胸を東北の山野に持し，腹を関東の郊原に据へ，富士山帯を以て帯せられ，尾濃の原野を下腹となし，畿内に下肢となり，山陰山陽の一足を後にし，南海西海の他足を前に進むるが如し，彼女は旭日に面し夕陽に背す，東向して望むが如し，西背して弱者を擁するが如し，彼女の麗姿に声あるが如し，耳あるものは焉ぞ聞かざるを得んや。

天女は，背中を（ユーラシア）大陸にむけ，顔は大洋（太平洋）に面している。太洋（太平洋）側を抱えるように天女が舞っている，非常に美しい容姿にしているわけですよ。で，富士山はちょうど天女の帯にあたり，山陰，山陽が足で，もう一つの足が四国・九州のほうだと。こういう容姿が日本列島だと描いている。内村鑑三は，このように宇宙からの目で，日本列島を天女のように見ているわけ。日本列島は天女のごとく美しい国土なのだと。ここには内村の愛国心を読みとることができます。宇宙船に搭乗した日本の乗組員もこのように日本列島を描いていないよね。内村の想像力がいかに豊かでロマンにみちたものであるかがうかがえます。

この日本列島については，下田沖に来航したペリー艦隊に乗船して密航しようとして下獄した吉田松陰が，その憂国の情を吐露した「幽囚録」（1854年／安政元年）で，「蝘蜒委蛇」とみなされる列島がおかれた状況を「常山の蛇」に託して述べております。

> 夫れ神州は東北は蝦夷に起り，蝘蜒委蛇（えんえんゐい）として西南のかた対馬・流求（りうきう）に至る，長さ千里に亙りて広さ百里に過ぎず。是れ常山の蛇に非ずや。首至り尾去る，豈に其の術なからんや。蓋し畿内は所謂六合（りくがふ）の中心にして万国の仰望する所，皇京の基，万世易はることなし。

日本列島は「蝘蜒委蛇」，蛇のようにうねうねくねっているから，中国の古典にある「常山の蛇」にならえば防衛できるのだと。常山に住む蛇は，頭を攻撃されると尻尾で反撃する。尻尾が攻撃されると頭で反撃する。そして胴体を攻撃されると頭と尻尾で反撃する。要するに，四囲が海に囲まれた日本列島は，そういう島だから，列島が一体となることが急務の課題だとみなしたのです。

同じ比喩にしても，内村鑑三の天女のほうがいいよね，蛇より。まあ，松陰も内村も非常に似ている発想を持っています。ここには，日本列島を一つにまとめていくことの大変なことをふまえ「夷狄」に対して列島が一体となって対峙していくことが必要なことが説かれています。私たちには，このような列島の構造に向き合って，歴史を読み解くことが問われているのです。

そういう点で見るならば，教科書の歴史は，「国史」という枠組みに呪縛され，ヤマトからの一元的な列島史になっているわけですね。列島の構造からみれば，辺境の視座，蝦夷地北海道と南西諸島，奄美琉球からみた列島を彩る歴史の構造は，天皇が所在したミヤコからみた世界，中央を軸とした国史的な枠組みが語る歴史，大きな物語の世界とは当然に違うわけです。

占領軍は，敗戦日本に対し，1946年5月に北緯30度以南の鹿児島県と沖縄県出身者を「南西諸島人」となし，日本から引き揚げさせた。皆さんたちは引き揚げが日本の植民地であった外地から日本へ帰国してくることだと思っているかもしれないが，琉球，奄美の出身者は日本本土から各出身地に帰された。占領軍は，奄美大島から沖縄を南西諸島となし，日本の領域外だとしたのです。確かに沖縄は，薩摩藩に占領されていたとはいえ，琉球王国であり，清国との朝貢関係を持ち，海洋国家として貿易立国しており，江戸幕府に対しても一個固有の位置を占めていました。

歴史を読み解くには，琉球日本というある時期につくられた認識を問い直す目で，時代社会の在り方を問い質さねばなりません。いわば歴史家の使命は，ある過去の出来事，その時代人心に併走して行くことで追体験し，

その時代の相貌を現在（いま）の場から想像し，歴史として創造的に描き出すことです。

荻生徂徠という儒者は，このように歴史を読む作法につき，米沢藩の家老との問答で，為政者が歴史を学ぶことで身につけるべきは「飛耳長目（ひにちょうもく）」，聞こえない声を聞きとる耳，見えないものを見る目だとなし，歴史は学問のなかの学問だと説いています。徂徠は，聞こえない声を聞き取り，見えない世界を眼前に在るごとく思い描く想像力こそが，政治を担う者の使命であり，歴史を学ぶことで手にし得るのだと説いたのです。

そうでしょ。平安時代というのは見えないけれど，「物語」を文字面で追いかけるのではなく，物語の世界に参入し，その時代に生きている人たちの声をどう聞き取るか，そこに動いている世界をどう読み解くかでは，手にする世界が違ってくるのでは。それは，何も過去のことではなく，まさに現代という時代，その社会を読み解くためにも，飛耳長目，想像力が必要なのだということです。わたしたちが歴史を学ぶのは，過去を過去として知りたいという尚古趣味ではなく，現在の己の居場所を確かめ，明日をどのように生きるかということにかかわる営みだからです。

まさに歴史は，一言で言うなら，想像し創造されていく世界，想い起してつくる世界なのです。だから，あなたがた一人ひとりが，日本に向き合い，日本の歴史をどのように想い描き，創るかということ，歴史を学ぶ知的作法を身につけていくということが問われているのではないでしょうか。ここに歴史を学ぶ意味があるのではないでしょうか。そこで学ぶのは，「正しい歴史」なるものを覚えるということではなく，わたしは歴史をこのようにとらえる，かく読み解いた日本の歴史をわたしの言葉で語れるようになる知的営みでないでしょうか。歴史は，世間で「暗記モノ」といわれますが，そうではなく己の場をふまえて見えざるものを読み解き，聞こえざる声に耳傾ける知的営み，想起し創造することで手にし得る世界だといえましょう。わたしは，明日をこういう世界にしたいという強き思いにうながされ，歴史を読み解いていきたいものと念じています。歴史は現

在の政治であり，現在の政治は明日の歴史なのですから。

3 「日本国」という物語 ── 日本とは何か

3-1 日本への眼

日本列島の住民，特に統治者である武士階級が「日本人」たる我を問われることとなった出来事，強烈な体験をするのは，日本近海に外国船が往来し，「夷狄」とみなしてきた外国人が上陸してくる事態に直面したことによります。日本人は，海禁といわれる鎖国政策で，海外渡航が閉ざされ，列島内に閉塞させられていましたが，外国船が日本近海に現れる事態に時代の変化を感じます。

なかでも1824年（文政7），常陸の大津浜（現茨城県北茨城市大津町）にイギリスの船員たちが水や野菜だとかを求めて上陸，断られたために強奪した事件は水戸藩に衝撃をあたえました。水戸藩は，この事態に驚き海防を強化するとともに，夷狄の侵害に対処するために日本とは何かを問い質し，日本人であることの精神的原器を確認します。ここに水戸藩の儒者会沢正志斎は藩主徳川斉彬に『新論』を密かに提出します。この『新論』(1825年）は，日本という国のかたちを説いたもので，日本人たる我とは何かを提示した作品として，ペリーの黒船来航，嘉永癸丑の衝撃に対峙しようとする武士たちにバイブルのごとくみなされ，読み語られていくこととなったのです。

> 謹みて按ずるに，神州は太陽の出づる所，元気の始まる所にして，天日之嗣，世世宸極を御したまひ終古易らず，固より大地の元首にして，万国の綱紀なり。誠に宜しく宇内に照臨し，皇化の曁ぶ所，遠邇有ること無かるべし。而るに今西荒の蛮夷，脛足の賤を以て，四海に奔走し，諸国を蹂躙し，眇視跛履，敢て上国を凌駕せんと欲す。何ぞそれ奢れるや。

外国の圧力に向き合う，対外危機を前にしたとき，よるべき日本人たる我のアイデンテイテイーとは何かが問われたのです。日本とは何なのかに想い致したとき，会沢は，日本は太陽の出る所で，元気の始まる所だと。「元気の始まる所」というのは，すべてのものを生み，育てる力のある所だというわけです。「天日之嗣（てんじつのひつぎ）」というのはアマツヒツギ，皇位のことです。太陽の末裔である天皇が代々治めているのが日本で，世界の中心だと。こういうイメージで日本を描いたわけです。日本は，世界の根源的な中心なのだから，「万国の綱紀」，すべての国を統治することができるのだと説き聞かせるわけです。つまり，外国に対して日本という存在の根拠が何ものも及ばないほどに大きなものだとの自己主張をふまえ，時代に対峙する政略を論じ，水戸藩主に建言したのが『新論』なのです。

その国際認識は，西のほうの荒びた野蛮人たち，長い足のヨーロッパの人たちが，四つの海をまたいで来て，国々を荒らしているが実にけしからんと。それが「四海を奔走し，諸国を蹂躙し」となる。この『新論』は，危機を生きる指針を示した書として，ひそかに写し取られて，ペリー来航の衝撃にはじまる幕末の危機の中で，人々の心の中に入っていきます。

3-2　嘉永 6 年癸丑の衝撃 ──「攘夷」という言説の世界

ここにみられる対外危機感は，1853 年（嘉永 6 癸丑）6 月 3 日にペリー艦隊が浦賀に来航，15 日に京都の宮廷が七社七寺に祈願の勅諚，伊勢大神宮神職に御教書を下賜したのにみられますように，黒船来航が大きな衝撃波として列島を覆うていきます。

京都の朝廷は，この事態に対して，「夷船近来屢々近海ニ寄リ，叡念甚ダ安カラズ，偏に神明之冥助ヲ仰グニ在リ，速ニ夷類ヲ退攘シ，国体ニ拘ラシムル莫レ」と宣します。この「夷類ヲ退攘シ」なる文言が「攘夷」という言葉となり，以後日本の対外危機感を表明する言説として喧伝されることとなったのです。

この攘夷決行が 1863 年（文久 3）です。近代日本にとり嘉永 6 年と文久

3年は歴史的に重要な年です。文久3年癸亥の年は，3月11日に天皇が賀茂神社に行幸，攘夷祈願をなし，幕府が5月10日に攘夷の決行を決断，5月に長州藩が下関海峡で米・仏・蘭を砲撃しました。平田門国学者は，このような時代の雰囲気のなかで師篤胤の「古史伝」を上木，出版するための募金活動に名をかりて全国の神社への攘夷決行の祈願に励み，天皇の世が到来することを目指す運動を展開していきます。このような時勢こそは，万世一系の皇統の国日本という国の物語を生み育て，「国体」とか「皇紀」という言説を作為していくこととなったものにほかなりません。

ここに強調された「万世一系」という観念こそは，民族の存在根拠とみなされ，やがて誕生した明治国家の基本法典である大日本帝国憲法第1条に「大日本帝国は万世一系の天皇之を統治す」と，かつ皇室典範第で第1条「大日本国皇位は祖宗の皇統にして男系の男子之を継承す」，第2条「皇位は皇男子に伝ふ」とすることによって，天照大神にはじまる皇祖皇宗の皇統につらなる男系長子が受け継ぐものと，神話的世界を現実の法的規範にとりこみ，日本統治の根拠となります。

「天皇制」なるものはこのような法的枠組みに天皇を位置づけることでうまれた統治形態にほかなりません。その意味では，日本の文明化をめざす歩みとともに造形されたシステムといえましょう。「文明」と「天皇制」は同時的に発生したものとしてみたらどうでしょうか？　かく位置づけられることとなる「万世一系」という物語こそは，対外危機意識にうながされた歴史意識をささえることで，「皇国日本」という「皇国の歴史」を造型することを可能としました。

さて文久3年にもどれば，三河の舞木（現愛知県岡崎市）の山中八幡宮の社司，平田篤胤の没後門人である国学者竹尾正胤は『大帝国論』（1863年）を出します。『大帝国論』は，日本を世界の王朝史に位置づけ，日本こそが世界で唯一の真の「大帝国」であることを，世界史に位置づけて描き出した歴史書として個性的であり，面白い作品です。

いわば世界の歴史の中に日本を書き込んでおります。ノアの箱舟からはじまり，ヨーロッパの国が，あるいは中国の歴史が，いかに王位簒奪の歴

史，血ぬられた歴史であるかを述べたものです。ローマ史は実に詳しい。誰のときに，誰を殺して，誰が皇帝になったかを延々と書いている。塩野七生の『ローマ人の物語』の先行版といえるかもしれません。各王朝における王位簒奪を述べた後に必ず，「然ルニ我ガスメラミクニハ」と，日本の国だね，王位簒奪のない「万世一系の皇統の国」であるとなし，日本の国こそが帝国の中の真の帝国であるというわけです。

世界に帝国は，「皇国」日本の他に支那・ドイツ・トルコ・ロシア・フランスの6国であるが，日本以外の国は「帝国」と名乗っているが，偽の帝国だと言うのです。「皇国」日本だけが本物の帝国。イギリスは，まだ帝国にもなれない王国にすぎないちっぽけな国なのに，「近来万国に縦横して，兵威甚盛なりと云ども，未帝号を云ず」と。その内容は，読んでみてびっくりしたけれども，実に正確に世界史が書いてある。

かく世界史を描くことで主張したいことは，日本のみが万世一系の皇統の国であり，古今無比の真の帝国で，他の国々は王位簒奪の血で彩られた偽の帝国だということです。まさに鎖国下で世界から孤立した日本は，対外的危機，外圧のなかで，自己存在の場，アイデンテイテイを「万世一系の皇統」の国，「皇国」であるという物語に求めることで，世界に向き合ったのです。ここには近代日本が負わされた精神的な刻印が読みとれましょう。

日本は，未だに国際的危機に立たされると，現在もそうですが「皇統」神話によりすがり，日本という国の歴史的個性を称揚したがるわけです。昨今の「美しい国日本」なる言説はこうした脈絡で理解すべきでないでしょうか。このような歴史書がなぜ書けたのか？　漢訳の地理書を読み，日本を中心とした王朝の物語としたのです。竹尾は平田篤胤の没後の門人です。当時，日本には漢訳の地理書をはじめとする洋書類が輸入されていました。

平田篤胤は漢訳聖書を読み，己の国学を大系化したわけです。本居宣長は『古事記伝』（1764年起稿－98年脱稿）を書きますが，平田篤胤は本居の考え方を独自に展開し，日本の神々を聖書の世界に学びながら体系化し，

神学化して平田国学をつくるわけです。日本の神様の中心は「造化神」であるアメノミナカヌシ「天之御中主」で，アメノミナカヌシはエホバの神，男神であるタカミムスビ「高皇産霊神」と女神であるカミムスビ「神産霊神」の２柱の下，イザナギ・イザナミをアダムとエバに擬した。かく提示された平田国学の世界は，「大東亜戦争」といわれる教科書で太平洋戦争となっている戦争の時代に，日本のキリスト者，神学者によって逆輸入されて日本基督教神学がつくられていきます。日本のキリスト者は，己の立つべき場をみきわめることなく，「文明の信仰」としてのキリスト者になったがために，この神話的な「国体」論が喧伝された戦争の時代に翻弄され，日本基督教神学を唱道する存在だったとも言えましょう。

3-3　吉田松陰の世界認識

嘉永癸丑の衝撃に向き合い，日本の明日に想いをめぐらせた一人が長州藩士吉田松陰です。松陰はこの危機の時代をどのように認識していたかを「幽囚録」でみることにします。

> 神州の東を米利堅（メリケン）と為し，東北を加摸察加（カムサツカ）と為し，隩都加（オコツク）と為す。神州の以て深鑑大害となす所のものは話聖東（ワシントン）なり，魯西亜（ロシア）也。（略）
> 安んぞ俊才を得て海外に遣はし，親しく其の形勢の沿革，船路の通塞を察するの如かんや。今急に武備を修め，艦略具はり礮略足らば，即ち宜しく蝦夷を開墾して諸侯を封建し，間に乗じて加摸察加・隩都加を奪ひ，琉球に諭し，朝覲会同すること内諸侯と比しからしめ，朝鮮を責めて質を納れ貢を奉ること古の盛時の如くならしめ，北は満洲の地を割き，南は台湾・呂宗の諸島を納め，漸に進取の勢を示すべし。然る後に民を愛し士を養ひ，慎みて辺国を守るは，即ち善く国を保つと謂ふべし。

日本の東は「米利堅」，アメリカで，東北にカムサツカとオホーツクが位置しているので，「深患大害」，ワシントンとロシアに狙われ，今にも植民

地になるかわからない。だから「今急に武備」，武力を備えて，「艦略具はり」，次の難しい字，礮は大砲の砲なんですね。「礮略足らば」，砲艦をととのえて蝦夷を開墾し，そこに諸侯を封じて治めさせ，カムサッカやオホーツクを奪う。さらに朝鮮を攻めて貢物を入れさせ，琉球には話し合いで日本のひとつとなるようにすすめる。北は満州をとり，南は台湾，ルソンの諸島を支配することで，海外進出に道をつける。その後で民を愛し，士を養い，国境を固めれば国を守ることが出来る。

ここに提示されている松陰の構想は，日本の帝国主義的な侵略主義の根となったものだとして，単純に非難する論者もいます。でも，歴史を読むときに大事なのは，こういう発言がその時代状況のなかでなぜ出てきたかということを考えなければならない。歴史を読む感覚に必要なのは，その時代の人心に想いを重ね，追体験するなかで，時代社会の空気を読まないとならないのです。松陰を歴史に位置づけて描くには，その言説を「史料」とするのであれば，「史料」なるものが生きている人間の「蛻の殻」にすぎないことに思い致し，そこに生命を吹き込むことが歴史家に問われています。そのためには，松陰と時代を同伴していくなかで，「史料」とされた言説が問い語る世界に参入していかねばならない。この追体験の作法が歴史を読み解く上で求められます。

歴史研究者だとか歴史家というのは，かかる作法を無視して，往々にして裁判官と検事になりたがる。弁護士はいないようですよ。よく聞く歴史的評価というのは，検事が論告求刑したのを，裁判官よろしく断罪していくような言説が多くみられます。でも，その時代の人たちが，どのように時代を生きようとしたかを見ない限り，時代の人心に同伴，伴走して読み解かない限り，歴史の深みはわからないのですね。だから，松陰は，圧倒的な武力で脅かされる中において思い描いた世界認識がこういう構図だったのです。国の力をまず強くして独立を確にし，民のことを考えよう。要するに国権を確立してこそ民権が可能になるとの想い，その民権が大事だというのが松陰だったのです。

松陰の弟子山県有朋は，総理大臣として，弱肉強食という帝国主義の時

代を生き抜く日本の進路を，1890年の第1回帝国議会の施政方針演説「外交政略論」で提示します。この「外交政略論」は，松陰の思い描いた世界を，当代の国際状況を怜悧に分析して具体的に論じたものです。そこには，「欧州的帝国」に対峙して日本を守る方策として，国境線である「主権線」を守るためにも，積極的に国境の隣接する地域を「利益線」と位置づけ，この「利益線」を進んで守らなければならないと説かれています。

そこでまず当初の利益線は朝鮮とみなされ，その利益線朝鮮が韓国併合によって主権線たる国境線になったときに，利益線が満州になるわけです。かくて日本の進路は，はてしなく，対外膨張への途を歩むこととなります。ここに島嶼国家日本は，対外侵攻を是とする大陸国家をめざし，対外軍備を強化していきます。そこには，対外軍備の強化のみがめざされ，松陰が説いた「民を愛し士を養ひ，慎みて辺国を守るは，即ち善く国を保つ」という思いが忘却されております。いわば日本が主権国家として欧州列強に対峙して独立を守るには，「民を愛し士を養ひ」という思いに目をむけることなく，強兵富国こそが唯一の戦略とみなされたのです。

日本が参入しようとしていた国際社会の秩序は「万国公法」が支配していた秩序です。日本の開国は，万国公法＝国際法の秩序下に文明化することにほかならず，欧化による主権国家としての独立をめざすことでした。この万国公法なるものは，主権国家間の調整統合をはかる規範ですが，キリスト教文明を基盤とする規範体系です。木戸孝允は，このようなヨーロッパの利権を前提とした万国公法の秩序をして，1868年11月8日の日記で「兵力調わざるときは万国公法も元より信ずべからず。弱に向かい候ては大いに公法を名として利を謀るもの少なからず。ゆえに余，万国公法は弱国を奪う一道具」だと，その本質を論難しています。

いわば国際法は，「キリスト教国，白皙人種，ヨーロッパ州」という「特権掌握的国民」をして，己の権利を主張する武器にほかならなかったといえましょう。このような主張は，新聞『日本』の陸羯南が『原政治及国際論』（1893年）で，「国際法なるものは実に欧州諸国の家法にして世界の公道にはあらず。この家法の恵を受けんと欲せば，国を挙げて欧州に帰化す

るよりほかに復た手段あるべからず」と指摘しているように，欧米列強の圧力にさらされ，植民地化の危機に怯える日本に広くみられたものでした。

そうですよね。国際法に従わなければ侵略するわけですから。いまでもこの感覚は，「民主化」「人権」だとかの大義にかかげ，その御題目を唱えて国家主権を否定する欧米的秩序観があるわけですから。昨今のイスラム圏に要求しているアメリカに代表される論理をみれば，この構図がよくわかるわけです。万国公法はそういうものだと。

いわば日本の指導者には，国際法の基準をアジアに持ってきて，アジアを欧米の植民地にしているのだ，というのが共通した認識でした。さらに西郷隆盛は，「文明」をめざす政府の在り方を批判し，「文明」というのは弱い人々の世界を侵略するためのものか，と論難しています。「文明」を大義とする秩序観は，欧米的支配の論理とみなされたわけで，その支配に対峙していく者にとり，攘夷という感覚が情念のごとく心身に刺った棘となり，民族の心を青白い炎で燃えつくさせることともなるのです。日本近代を生きた人びとにみられる攘夷をめぐるアンビバレントな感情は，こうした「文明」に向ける眼を読みとらないかぎり，解析できないのではないでしょうか。

4　攘夷という志 ── 夷情探索・ナショナリズムの隘路

4-1　御一新から維新へ ── 復古革命の精神的原点

攘夷というのはナショナリズムの発露と考えたらいいでしょう。この攘夷は，幕末に広くみられた武力で外国人を切り殺すものだとみなされがちですが，外人殺傷というような激発型のテロをいうのではありません。攘夷にこめられた思いは，外国を知ることで，外国に勝たなければならないということです。この思いこそは，「夷情探索」という形に出るわけで，外国を知ることで己の居場所を確認する，アイデンテイテイを発見することで新たに蘇生していくことでもあります。

攘夷というものを通して，日本を，日本列島を一つの国にまとめなきゃ

ならないということが，御一新，維新という形の明治維新になります。私は，明治維新は復古革命だとみなします。「神武復古」をスローガンにした革命，「御一新」を目指すことで列島を一つにまとめようとしたわけです。この御一新への途は，楠公信仰 ── 南朝顕彰，神武天皇信仰，御陵修補という運動として展開されていきます。

楠木正成って知っている？　アァ，よかった。少し知ってる。少し聞いたことがある。この頃は話していても難しんだよね。この物語は皆が当然知ってる，共通した記憶だと思って話していても，共通した場がないもので。楠木正成，楠公といっても，何も知らない人もいるもので。世代を超えて共通した記憶が失われているのが現在日本の問題なのでしょうね。

革命というのはね，時の権力を武力で打倒すれば可能となるものではない。人民が時の権力を否定することが正義なのだとみなし，そのために革命を求めるようになる精神文化運動がないと，革命は起こらないのです。フランス革命も啓蒙主義があったわけです。ロシア革命ではナロードニキたちの働きがあった。中国革命では，毛沢東が農村解放をかかげ，農村から都市を包囲する持久戦により日本軍を敗退させ，新中国を建設し，改革開放を全中国にもたらす原動力となったのが文化大革命です。現代中国は文化大革命によって可能となったのではないでしょうか。

日本では，そういう意味で言うと，楠公信仰・南朝顕彰，南朝の遺産を継承しようということから，さらに開国による物価騰貴などの世の乱れが公方様 ── 徳川の世も終るではないかという空気を醸成し，神武天皇の御代を理想視する信仰を生みました。こうした世の乱れは，盗掘による御陵の荒廃で天皇霊が荒ぶる霊となって暴れさせたとみなされ，御陵修補への動きが盛り上がってくる。ここには，御陵修補という文化財保存運動ともいうべきものが強い政治的意味をもつことで時代精神を先導し，革命運動の精神的原器となっていく様相が読みとれましょう。ここに生れた現状打開への期待は，徳川将軍家の支配を批判し，新しい世を期待する御一新，すべての秩序を新しくしようという雰囲気を醸成していきます。そのような気分こそは，平田国学などのイデオロギーに先導され，天皇のオオミタ

カラ（百姓）として人民が平等に暮らしていた「神武」の世に回帰しようという神武復古をめざすことになったのです。

かくて御一新で成立した新政府は，神武復古を掲げた倒幕運動，楠公信仰に象徴される革命の精神を政策として具体化していきます。このことは，神武天皇の貌をして，「神武復古」の世を維新として実現した明治天皇に重ねて造形せしめたものにほかなりません。

1872年（明治5）11月15日	神武天皇即位をもって紀元とし，即位日1月29日を祝日と定める（73年10月14日これを2月11日に改める）
1873年 1月 4日	五節句を廃止，神武天皇即位日（紀元節）と天長節を祝日と定める
1889年 2月11日	大日本帝国憲法・皇室典範公布
1890年 2月11日	金鵄勲章創設。橿原神宮創建（紀元2550年）
10月30日	教育ニ関スル勅語（教育勅語）発布

今日2月11日は，明治に「紀元節」として制定され，1966年に佐藤栄作内閣の時に国民の祝日として衣替えして「建国記念日」になったものです。紀元節が建国記念日として復活したのは，佐藤首相がこの年に古都保存法ヲ制定して京都市（平安京），奈良市（平城京），橿原市（神武天皇 ── 橿原神宮）等々の天皇にかかわる歴史的故地を指定し，「天皇の国」であることに目を向けさせ，さらに1968年が明治維新から100年ということで明治100年記念事業を国家的事業と営むことを決定するなど，明治維新で誕生した「皇国」日本という物語を戦後日本における国民の記憶にすることで，国家の精神を造型することをめざしたものにほかなりません。国家の文化政策は，きわめて強い政治性を帯びたものであり，国民の歴史意識を規定するものなのです。

ここにみられる記紀神話色の強い民族心を揚言する政治作法は，1968年に小笠原諸島返還，小学校における神話教育の復活をうながし，71年に沖

縄返還を実現，72年に沖縄県が発足することにみられますように，占領体制から日本の真の独立がここに達成されたとみなし，内閣の政治的遺産として受け継がれていきます。かかる国家ナショナリズムが提示した民族的自覚は，帝国大学的体質で営まれてきた戦後大学の権威的体質に異議を申し立てる学生反乱が列島を揺るがせましたように，まさに国家の方途めぐり戦後日本の営みを根本から問い質すこととなりました。しかし国家の在り方は，いまだに神話的物語に照らされた国家ナショナリズムにのみこまれ，わたしの場からの問題提示もなされていないのではないでしょうか。

この学校，基督教独立学園は，このような国家ナショナリズムをささえる「天皇の国」という神話に向き合い，国家によって思想良心がおびやかされた歴史を繰り返さないようにすべく，2月11日「建国記念日」をあえて「信教の自由を守る日」と位置づけ，今回のような授業を企画してこられたのだと理解しております。そこで，この授業がめざすのは岐路にある国家に向き合い己の場を確かめることをめざしたものだと思い，わたしなりに想い描いてきた「日本という国」の容とはなんであったかを問いかけることで，ここに招かれた者としての責をはたすこととします。先ほど，先生がたの発題と重ねて言えば，神武天皇即位日を日本の紀元にすることで，日本の国の歴史が創られてきた，そのことを問い質したいのだと。

日本紀元というのは，西暦に対し「皇紀」ともいわれますが，1872年につくられたのです。翌73年には，民衆の暮らしに根ざしていた五節句祝を廃止，新しい国家の祝日として，神武天皇即位日，後に紀元節とし，天長節現在の天皇誕生日を定めて布告，その後これらの国家祝祭日に皇室祭祀をとりこむことで国家行事を強化し，民衆の暮らしを彩っていた諸行事を否定していくことで，皇室 ── 天皇家の行事を暮らしの場に定着させようとする営みにほかなりません。ここに制定された国家祝祭日は，西洋的な文明のシステムにもとづくもので，旧来の慣行で営まれている民衆のくらしを「文明」的に改造していくことをめざしたものです。

当時の人たちは，「この頃お上は，訳のわからない日を祝日にする。赤丸を売りたい看板を出しているのか」と。赤丸というのは日の丸のことだか

らね。そして，江戸時代に赤丸屋っていうのは堕胎薬，密かに子おろしの薬を売る薬屋のことなの。国旗といわれる「日の丸」の旗をわけのわからないものと揶揄している。民衆の暮らしでは地獄の釜のふたが開く日（正月と盆の 16 日）や，お釈迦さんの誕生日（灌仏会 4 月 8 日）のほうが重要なのに，訳のわからない国家祝祭日を祝わせると。

国家祝祭日をはじめ，日曜日が国民に定着していくのは，明治の後半ですが，商家とか職人の世界ではそれぞれの職種による休み日が大切にされている。ただし，お役所の世界は西洋暦が支配する文明的秩序を範としていますから違います。それから，内国植民地としての北海道は，文明化をめざす国家の統治下，文明政府の「飾り窓」のようなものでしたから，国家暦的秩序が優先します。しかし民衆の世界では，旧暦的な感覚がずっと残るのです。旧暦的感覚がなくなるのは，民衆の暮らしが全く激変する高度経済成長前夜ぐらいになります。

1889 年 2 月 11 日に大日本帝国憲法が発布され，皇室典範が制定されます。この日，陸羯南は新聞『日本』を創刊，記念事業として 1 等賞が 300 円という懸賞をかけた日本歴史上の人物の絵画や彫刻を募集。この事業で入賞した作品が竹内久一の神武天皇像です。竹内は，神武天皇の貌をどうしたかというと，明治天皇の貌で造形したわけです。だから，神武天皇の貌と明治天皇の貌は同一，神武天皇像は明治天皇像でもあります。かつ神武天皇の足元にある台座は日本を中心とした世界地図です。ここには，明治天皇と神武天皇を一体化することで，「神武復古」がめざす世界が世界に冠たる国家になるのだという思いが表現されています。まさに神武天皇像は「神武復古」という時代の精神を体現したものといえましょう。

さらに 1890 年には金鵄勲賞が制定されます。金鵄勲賞って知らないでしょうけれど，戦場で勇敢に戦った将兵に授与される最高の勲章です。金鵄というのは，神武天皇が東征しているときに，その弓の上に金色の霊鵄が乗り，賊である長髄彦を平らげたという神話によるものです。金鵄勲章は神武東征による国家統一という記憶が埋めこまれて造形されています。

この 1890 年は紀元 2550 年ということで，4 月 2 日に神武天皇を祀る神

社として橿原神宮が創建された。そして10月1日に教育勅語が出され，翌91年には御真影が下げ渡されるわけです。神武天皇と明治天皇を一体化し，明治天皇の御真影を下げ渡して教育勅語と一体化する作業をとおして，記紀が描いている国土統一，国家創成の物語をして，明治維新にはじまる近代日本の新しい国造りの神話に蘇生し，万世一系の皇統の国日本という物語が完成します。まさに日本という国はここに確定し，日本国民が誕生していくこととなります。日本国はここに誕生したともいえましょう。

4-2 「楠公」という物語

楠社・湊川神社は，この橿原神宮より先につくられたもので，明治維新後に直ちに造営に着手されます。楠木正成を祀る神社の創建は，討幕が具体化してくるなかで尾張藩が建言し，新政府誕生と共に具体化されます。尾張藩は，徳川御三家のひとつですが，紀伊の吉宗が将軍家を継いで紀州幕府となったがため，将軍家に距離を取り，いち早く朝廷に忠誠心を披歴したのだといえましょう。尾張徳川家が将軍吉宗打倒で謀略をくりひろげるという話はTVの時代劇に定番のごとくよく登場してきますが，みたことありませんか。

この楠社創建は，京都の天皇を戴く薩長等の討幕勢力からなる新政府が1867年（慶応3）12月に王政復古の大号令で「百事御一新」を宣言，新政府を樹立，国家の立場を1868年3月「祭政一致」「神祇官復興」と宣布，7月に政府の基本を「五箇条の誓文」「五榜の掲示」を提示して出発するにあたり，4月に楠木正成に神号を授け，神社造営をめざす募金をはじめたのです。心あるものは誰でもよいから，一本の木でも土くれでもよい，わずかな金でもいいから，それぞれが持ち寄って社をつくろうと呼びかけています。この布告は，聖武天皇の大仏造営の詔を想起させるもので，国民的事業として営むのだという強い意思を表明したものといえましょう。1873年（明治6）に別格官幣社湊川神社となります。

造営事業は，討幕の先駆けとなって幕府によって殺された志士たちの追

悼祭が楠公を追慕する楠公祭に託して営んだことに発します。楠公祭に託したのは，幕府に背いた「テロリスト」ですから，いかに憂国の「志士」とみなそうとも，表立って追悼式典を催すことはできません。そこで楠公祭に託し，これら政治的に非業の死を遂げた「志士」の追善供養を営み，「討幕の義挙」という政治的死とみなし，討幕の「革命戦士」として顕彰することで，反体制運動の象徴に昇華し，討幕へのエネルギーを活性化したのです。いわば国民国家創成のための政治的死は，当世風にいえば「テロリスト」ともいうべき空しい死者の存在をして，「国家の英雄」である「義士」とみなし，聖化していくことで国家存立の象徴にまつりあげ，愛国運動の後継者を生み育てる器とみなしたのです。

この楠公祭が提示した世界は，1868 年 5 月に嘉永 6 年癸丑以来の「殉難者の霊」を京都東山に祀る営みとなり，その「忠魂」を慰め，「天下の衆庶」がますます「節義」を貴び，「奮励」するようにとの布告によって，新国家の聖地を造型し，やがて霊山招魂社 ── 霊山護国神社となっていきます。なおこの間に，「百事御一新」という神武復古を掲げた革命は，1870 年の宣布大教の詔で「百度維新」と「惟神之大道」をめざすとされ，総てをあらためる「御一新」が「維新」になってしまったのです。

このような政治の作法は，ある種の死，事件をして時代の政治的課題に引き寄せて「政治的死」と意味づけ，時代の人心を嚮導していく器としていく営みとして現在も広く見られることです。ここにみられる政治の作法は，フランスの新聞社が襲撃された際，「シャルリ」を合言葉に「言論思想表現の自由」を守る運動の高揚をもたらし，フランスの「愛国運動」を刺激し，反イスラムの潮流となったなかにも読みとれましょう。

新政府は，楠社・湊川神社の創営とともに，南朝のために尽した人々の名誉回復をはかるべく，まず建武新政のヘゲモニーで敗れて鎌倉に幽閉されて殺された護良親王を祀る鎌倉宮（官幣中社）を 1869 年に，後醍醐天皇の第 4 皇子，征東将軍宗良親王の井伊谷宮（官幣中社　静岡県）を 1872 年に創営，さらに 1878 年に南朝遺臣を祀る菊池神社（菊池氏三代 ── 武時・武重・武光／熊本県），名和神社（名和長年／鳥取県）を別格官幣社に列し，

建武中興15社の誕生となります。このような楠社造営から南朝関係の神社建設は，討幕の精神的源流を生み出し楠公信仰に連なる南朝顕彰を新政府が政策課題に位置づけ，国家の記憶となし，国民精神の原器を確立していこうとしたものです。

天皇をめぐる物語は，このような政策によって，国民の記憶として日本人の身心に埋め込まれていきます。かく南朝に収斂してく記憶の造型は，南北両朝を併記していた国定教科書の記述が問題にされ，南北朝正閏論争となり，1910年の改定以後の教科書で南朝を正統とする記述となり，足利尊氏を「逆賊」とみなすことで完結したのです。

また湊川神社は，対外戦争に出征する部隊が神戸で下車して参拝，記念撮影などをする慣行にみられますように，天皇の下にある武運長久を祈願する社とみなされていました。日清戦争や日露戦争では，広島が大陸への出港地ですから，東京の連隊は明け方に神戸に着くと湊川神社に参拝，広島に向かっています。このような楠公への信仰は,「大東亜戦争」において戦局打開の戦法とみなされた特攻に選ばれた若者を支える精神的拠り所となり，己の肉体を武器にした「必死」の門出を前にした決意をささえたものです。その烈たる想いは，楠公精神を表す「菊水の旗」や「七生報国」を掲げて己の志を世に問うていますように，死を負わされた青年学徒の心に刻まれた世界だったのです。

七生報国「七たび生まれて国に報いん」という言葉は，楠木正成兄弟の思いを表明したものですが,「楠公の物語」として国民が広く共有していく記憶として身体に埋め込まれ，日本国民の心を呪縛していきました。その声は，必死を負わされた特攻に馳せ行く青年が，無慚に死なねばならない己の生によせる想いを吐露した悲痛な叫びに聞くことができます。

さらに鳥羽伏見戦争にはじまる戊辰の内乱で天朝政府のために死んだ者は，江戸開城後に江戸城西の丸で招魂祭が営まれ，1869年に東京招魂社に祀られました。この東京招魂社は，鳥羽伏見から会津・函館へと続く戦争の死者を祀るとともに，1875年に京都東山の霊山官祭招魂社に祀られていた嘉永癸丑以来の殉難者を合祀し，79年に靖国神社となります。靖国神社

は，国家のための戦死者を祀るだけではなく，討幕のために非業の死を遂げた人々，連座した妻子までをも祀り，さらに国家に忠誠を尽したと認められる人物を時に応じて合祀していくことで国家精神を体現する器たる存在をかためていきます。まさに国家の正史を担う場，国家廟として国民精神の要とみなされ，臣民たる「国民の物語」を語りかける世界にほかなりません。

1890 年には，日清戦争の勝利がもたらしたナショナリズムが高揚するなかで，住友家は別子銅山 200 年祭記念として，その産銅で高村光雲ら東京美術学校の手で楠木正成像を鋳造。この正成像は，1897 年に完成，1900 年に宮内省が献納を許可し，宮城（1948 年 7 月 7 日に「皇居」と呼称）前に設置されます。宮城前の楠木正成像は，現在もみられますが，日清戦争後の臥薪嘗胆という熱気にみちた国粋主義，ナショナリズムを表明したもので，日露戦争へと直走る国民感情を代弁し，日本の国民精神を造形したものにほかなりません。このような楠公をめぐる記憶は，小学唱歌のみならず，広く国民が口ずさむ多くの歌として人口に膾炙し，日本人の心に刻み込まれていったのです。

かく正成に代表されて語られる歴史とは何でしょうか。伊藤博文は，日本の憲法をつくるために，ヨーロッパに勉強に行った際，先生のグナイストから「あんたの国の憲法つくるのを手伝えと言うならば，あなたの国の歴史を知らなければならない」，と言われた。伊藤博文，ハタと困った。「あぁ，そういえば，日本には歴史がない」と。どう思いますか？　日本には歴史がない？　伊藤はそこで初めて「日本の歴史とは何だろう」と思ったわけです。このエピソードには，歴史がそのものとしてあるのではなく，現在の場から過去を読みとる，読み直すことで創られた物語が歴史だということがよく言いあらわしています。

伊藤博文をはじめとする幕末の志士たちは，徳川に代わる新しい国家をつくるために，日本という国のかたちを知ろうとして出会ったのが頼山陽の『日本外史』（1827 年成立／1836・37 年頃刊）でした。頼山陽は，日本という国のかたちが尊皇にあるという物語を『日本外史』としてまとめた

のです。『日本外史』が説く尊皇の歴史は，外敵にさらされた日本とういう国のかたちを提示した書とみなされ，討幕へ馳せ行く者の心のよりどころとなりました。山陽はこの物語で足利軍の前に敗北した楠木正成，正季兄弟の姿を次のように描き，長子正行と別れた櫻井の駅を訪れた日のことを楠氏論賛に認めています。

> 正季に謂つて曰く，「死して何をかなす」と。曰く，「願はくは七たび人間に生まれ，以て国賊を殺さん」と。正成，欣然として曰く，「是れ吾が心を獲たり」と。
> (楠氏論賛)櫻井駅なる者を訪ひ，これを山崎路に得たり。一小村のみ。過ぐる者或は其の駅址たるを省せず。蓋し足利・織・豊の数氏を経て，世故変移し，道里駅程，従つて輒ち改れるのみ。余れここにおいて，低回して去る能はず。金剛山の雲際に嶷立するを願望し，公の義を挙ぐるは秋，及びその子孫の拠つて以て王室を扞護せしを想見するなり。
> (略)
> その大節は巍然として山河と並び存し，以て世道人心を万古の下に維持するに足る。

「七生報国」というスローガンは，正成，正季兄弟が刺し違えて果てる時，弟の正季が吐いた「七生滅賊」に由来する言葉です。この言説は，正成の想いを述べたもので，ここに死んでも「七たび生まれて天皇に敵対する者を亡ぼして国を守るのだ」という天皇の国家に殉じる思いを吐露したものとして，天皇の国をささえる精神的原器として国民に埋めこまれたのです。櫻井駅は，淀川畔にある摂津国島上郡の小邑（現大阪府三島郡島本町）で正成が長子正行に「おまえは生きて天皇のために働け」と言い遺して湊川に出陣した場所です。この別離は，後に「青葉茂れる」ではじまる落合直文「楠公の歌 ── 櫻井の訣別」が小学唱歌となり，広く歌われることとなりました。

山陽は，楠公の「櫻井の別れ」という記憶がつまる史蹟を訪問し，その

地が訪れる人とてなく忘却されて荒廃していることを嘆き，悲しくて頭をめぐらせて何度も回ります。史蹟の荒廃は時代人心が尊皇心を失った証とおもわれたのです。ここに歴史を読みとる目があります。記念碑は，それをめぐる記憶と重ねられることで蘇生され，時代の精神をかたち造り，時代を動かす力となります。記念碑にこめられた世界は，それをめぐる記憶を想起させ，歴史の精神を追体験する器となり，新しい時代精神をつき動かすものとなるのです。ここには，国民国家が国民の記憶を国家の記憶にして行く回路があり，革命記念碑等々のモニュメントの造営が国家事業として営まれる原点が読みとれましょう。

まさに楠木正成は，北朝の足利尊氏軍に敗れて湊川で非業の死を遂げたが，いま歴史として蘇り，尊皇の極みと評価されているように，寺田屋をはじめ幕府の手で非業の死を遂げようが，後世に「義挙」として評価され，歴史として蘇生出来る，との想いが討幕をめざすテロリズムへと奔らせたのです。そのため薩摩や長州は楠公祭を藩の行事として催し，討幕への思いを高めたのです。このような作法は，日本だけではなく，広く世界の革命運動においてみられることです。フランスにおけるジャンヌダルクの物語を楠公に重ねて読み直すのもおもしろいのでは。旧社会主義国にみられる革命記念碑と革命博物館もそのような器のひとつなのです。

4-3　新島襄の初心

新島襄は同志社を創立したクリスチャンだね。彼は備中高梁藩の船で訓練を受けていたとき，兵庫港で上陸した際に楠公廟を訪れ，水戸光圀が建立した「嗚呼忠臣楠子之墓」（1692 年／元禄 5 年）に参拝，朱舜水の賛文を読み，感きわまり，「嗚呼忠臣楠子之墓と記したるを読みて一拝し，又読みて一拝し，墓後に廻り朱氏の文を読めば益感じ涙流さぬ計りなり」，と「玉島兵庫紀行」1862 年（文久 2）12 月 6 日に認めている。

> 石碑に左楠公の墓と記してありし故，左に曲り数歩行けば一筋の道あり，双方は皆平田にして，北に向二町程も行けば松樹青々として，内

に楠廷尉の廟あり。此に於いて手洗ひ口そゝき廟前に拝すれば，何と無く古を思ひ起し，嗚呼忠臣楠子之墓と記したるを読みて一拝し，又読みて一拝，墓後に廻り朱氏の文を読めば益感し涙流さぬ計なり。其より廟畔に徘徊すれば，時々寒風吹来り，松にす（そ）よげば忽ち思付，幾とせも尽ぬ香を吹よせて袖にみたす松の下風，と吐出けり

クリスチャン新島襄の原点にはこの時の想いがある。このことは，現在同志社が保存している御所のそばにある新島襄旧居の書斎に掲げられているのが若き日に感涙にむせんだ楠公の墓誌，現在の湊川神社にあるものの拓本であることにみることができます。楠公によせる新島襄の思いは，ひとり新島にとどまるものではなく，明治のキリスト者に広くみられるものです。楠木正成の事績に重ねてイエスの十字架を想起した。この営みこそは，日本のキリスト者がキリスト者たる我の場を確認した原点であり，信仰の営みを支える世界を表明したものといえましょう。

若き新島は，天皇によせた楠公の忠誠心に己の心を託し，欧米列強の脅威にさらされる日本の危機を打破し，西洋に対抗しうる国家の独立をめざす攘夷をはたすためには外国を知らなければならないと決意し，開港場函館からの密出国をめざします。攘夷を実現するためには「夷情探索」が急務の課題と思いみなしたのです。

夷情探索への思いは，好奇心にみちた日本の民衆ほどずる賢い外国人に騙されやすいものはいないと，日本人のありかたを「奸民狡夷」となし，植民地にされるのではないかとの不安にうながされた，新島をはじめとする武士の心を激しくつきうごかしたものです。新島は開港場箱館で見聞した民衆の姿に日本植民地化の危機をつぶさに実感しました。このような思いは，下田から米艦での密出国を企図して失敗，下獄した吉田松陰に通じるものです。松陰は，その想いを「幽囚録」に「夷情を審らかにせずんば何ぞ夷を馭せん，夷情深遠はなはだ知り難し，航海誤り来る天下の計，男児寧んぞ作さん一身の悲」と認めます。

夷情は深遠で知ることが難しいだけに，わたしの密出国の失敗はおのれ

一人の悲しみ以上に天下の悲しみだ，との言には松陰の自負がうかがえましょう。夷情，外国を知らなければ何もできないとの痛切な念は新島襄にも共有されたものです。新島襄は，密出国すべく箱館に行き，ロシア領事館付司祭，ハリストス正教のニコライに古事記を教え，ニコライから英語を習い，箱館で見聞を広めます。このときの日記が面白い。ニコライは，「古事記の履中天皇」の時代がロシアで多くの殺戮があった野蛮な時代だったと，さらにナポレオン戦争の実態についての話をしたようですが，その話に新島は「嗚呼世益開け，人智高上し，空上に而戦ひ地下にても戦ふに至る」と，文明世界の戦争に驚愕しています。ニコライに「お前，アメリカじゃなくてロシアに留学しないか」，と言われたら，「やっぱりアメリカがいい」と，アメリカに密出国するわけです。

「函館紀行」には，函館から密出国するまでの日記ですが，1864 年（元治元）5 月 7 日に，ロシア病院を訪れた時，そこで痛感した強い危機感が直截に述べられています。

> 予切に嘆ず，函楯の人民多年魯の恵救を得ば，我か政府を背にし却て汲々として魯人を仰かん事を。嗚呼魯の長久の策を我政府察せさるは何ぞや。茲に堤堰あり，水是を破る事少許，然し少許なるを以て早く是を収めされば，水遂に全堤を破り，田地を荒らし，人家を流かし，人民を害するに至らん。嗚呼我政府早く函楯の少しく欠けし堤を収めされば，遂に魯国の水全堤を潰やし，人民水に順ひ流れ，百万其れを塞ぐ能わさるに至らん（嗚呼我の嘆息はゴマメの切歯と同じ事か）

ロシア病院は，函館の住民に広く開かれており，親切に医療をしてくれ，人気があった。午前中に回診があり，処方箋が出され，それにもとづいて薬がベッドに置かれる。病人に合わせてスープをはじめとする食事が出される。このような親切さにひかれて箱館の住民がロシア病院に押しかけてくる。その光景に，新島は「函楯の人民多年魯の恵救を得ば，我が政府を背にし却て汲々として魯人を仰がん」，と。函館の人たちは，ロシアの慈恵

政策を享受していくうちに，日本は駄目じゃないかと思うようになってくる。このことは，仮に堤に小さな穴があき，その穴を放っておくと，大水になって流れていくように，いつの間にか，函館の人たちはロシア贔屓になって，日本なんかどうでもいいとなってしまうのではなか。気付いたら箱舘がいつのまにかロシアのものなってしまっている，と。これが「奸民狡夷」なのです。「奸民」よこしまな人民がずる賢い夷人，外国人の慈恵策に誑かされて，気がつくと何時の間にか箱舘がロシアの支配下になっている，ロシア植民地になるという間接侵略への危機感に気付いた。

このような危機感は，新島をして，日本とは何か，皇国とは何かということに想いをいたさせ，己の存在の場を確かめ，天皇の国，皇国日本との思いを強くする。この日本を強国にするには，外国を知らなければならないとして，密出国してアメリカに行き，強力な文明とは何かを学び，その文明の根っこにはキリスト教があるとして，キリスト教に入る。

4-4 「楠公」によせる内村鑑三の想い

楠公への想いは，新島襄だけかというと，内村鑑三にしても強い共鳴盤があります。内村は,「第一高等中学校不敬事件」がもたらした流竄の日々を生きた思いを,「第一章　愛するものゝ失せし時」で事件の心労による妻かずの死,「第二章　国人に捨てられし時」で「不敬事件」がもたらした困苦のなかで,「基督教の原理を以て自ら慰めんことを勉めた」信仰の世界を描いた『基督信徒の慰』(1893年) で，福沢諭吉の「楠公権助論」を批判し，世の敗者とされた己の心を楠公に寄せて問い質し，楠公の事跡に我が身を見出していたのです。

> 楠正成の湊川における戦死は決して権助の縊死にあらざりしなり(福沢先生明治初年の批評)，南朝は彼の戦死によりて再び起つべからざるに至れり，彼の事業は失敗せり，しかれども碧血痕化五百歳ののち，徳川時代の末期に至て，蒲生君平高山彦九郎の輩をして皇室の衰頽を歎ぜしめ勤王の大義を天下に唱えしむるにおいて最も力ありしも

のは嗚呼夫れ忠臣楠氏の事跡にあらずして何ぞや，ボヘミヤのハッス将に焼殺せられんとするや大声呼でいわく「我死するのち千百のハッス起らん」と，一楠氏死して慶応明治の維新に百千の楠公起れり，楠公実に七度人間に生れて国賊を滅せり，楠公は失敗せざりしなり。

基督の十字架上の恥辱は実に永遠にまでわたる基督教凱陣の原動力なり，基督の失敗は実に基督教の成功なりしなり。

「ボヘミヤのハッス」というのは，ルターに先立つローマ教皇を告発した宗教改革者ヤン・フスです。フスは火炙りで殺されるときに大声で，自分が死んだら千百人のフスが起こってくる，と叫んだ。それと同じで，楠木正成は死んだが，「慶応明治の維新に百千の楠公起れり，楠公七たび人間に生れて国賊を滅せり，楠公は失敗せざりしなり」，と。要するに，楠木正成の精神，楠公信仰が維新の革命を成功させたのだというわけです。だから楠公は失敗したのではないのだ。同じように「基督の失敗は実に基督教の成功なり」，とイエスが十字架で死んだのは，十字架の信仰を説くキリスト教の成功だったのだという。

このように説く「十字架の福音」を聞いたことある？　ものすごく，わかりいい話ではないですか。明治の人たちが，それなりに聖書を読んでイエスに魅せられていったのは，楠公という記憶が共有されている場からイエスのメッセージが受けとめられたからです。イエスの忠誠心は正成の天皇への忠誠心という物語にかさねて理解された。イエスの十字架の死は，楠木正成をはじめ，時代が共有してきた記憶に託して語り伝えられ，一つの物語の世界を重ねて語られていくことで，人々の心をとらえた，信仰に導いたのです。

内村鑑三は，『太平記』がものすごく好きだったのね。アメリカに行くときに，何を持っていったかというと，『聖書』と『太平記』と『古今集』なの。古今集は宮部金吾からの餞別。とくに『太平記』が好きだった。「正戒程ノ者イマダ無リツル」と語る『太平記』を読むということは南朝への思い入れがあったことによります。内村鑑三の話が面白いのは，こうした物

語や歌への思い入れが強いだけに，西行などの歌に託して信仰譚が話せるからです。内村を理解するには，聖書の講解を読むよりも，『聖書之研究』の雑報を読んだほうがいいかもしれない。そこには素顔の内村の姿がある。だから世に多く出ている内村鑑三伝を読んでいてある種の強い違和感をもつのは，おかしいなと思うのは，一生懸命に内村の信仰談義を説くことに熱心になっているものの，どこか等身大の内村鑑三じゃないんだよね。等身大の内村というのは，まさに平家物語を語り，蓮如の御文を語りながら，己の信仰世界を己の言葉で伝えようとしている姿にあるのではないだろうか。

たとえばロマ書講義のときには，恵心僧都源信の往生要集や法然のもの（黒田真洞・望月信享編『法然上人全集』1906年）などを読みながら，ロマ書と格闘し，時には西行の歌に託して信仰者の心のありかを説こうとする。この作法は，昨今の神学者や牧師がバルト等々の口をかりて「信仰」を強要する営みとはちがい，己が主語で己の信仰を問いかけるものです。

いまのキリスト教がだめなのはね，牧師にしても，神学者にしても，内村などのように国民が共有してきた記憶の根への目，記憶を共有してきたところの基盤を理解しようとしない，己の根に在る世界について無知だからです。だから，民衆に己の信仰世界の語りかけができないわけ。内村は忠臣蔵の話，大石良雄ら赤穂の「浪士」にみられた主君への忠誠心に重ねてイエスへの忠義を語っているし，こちらの鈴木弼美のものを読んでいても，その語り方には秀吉の話しが出てくるよね。だから，キリスト教を知らない人，違和感を持っている人も，そこからファーッと信仰の世界に入っていけるわけね。内村の良さというのはそれなのです。そういう信仰受容の仕方は，ある意味でいえばまさに志士仁人意識につらなるもの。志士が身を殺して仁をつらぬこうとしたように，信仰に生きるものは信仰のために己の身を犠牲にすることをいとわない者だとの信念にささえられていました。要するに，自分の信じたもののためには，自分を殺しても忠誠をつくすのだという思い。イエスをそういう眼で見たからこそ，楠公や「忠臣蔵」の物語にイエスの信仰に重なる世界が読みとれたのです。

このような日本のキリスト者のイエス像は，何も内村だけではなく，お雇い外国人のグリフィスが「イエスは万代の侍」だと紹介したなかにも読みとれます。イエスが十字架で死んだのは日本でいえば侍の死だと説くことで，日本人の心を開いたわけです。このように「イエスの十字架」をめぐる読み方は，一人内村のものではなく，聖書の物語を受けとめたものに広くみられたことといえましょう。そこでは,「十字架のイエス」への忠誠心は主君への忠誠ともみなされたのです。それだけに佐幕派の武士たちがキリスト教に入っていったのは,自分たちの志士意識に重ねて聖書を読み,キリスト者となることで最先端の「文明の精神」を身に付け，国家の精神的指導者となり，敗残者の場を勝者に転じようとする想いです。かかる思考の回路は，信仰を「国家の器」とみなして受けとめたがために，時代と国家の動きに合わせて信仰を語るということにもなったといえましょう。なお，グリフィスは，来日して福井藩で英語の教師となり，後に帝国大学で化学を教えた人物です。

5 「国民」の育成 ── 母乳とともにのみこんだ愛国心の世界

5-1 国家 ── 内的国境・外的国境

国家には内的国境と外的国境があります。外的国境とは国境線のことで，内的国境は国家というものを支える精神的な器，さきに福沢諭吉が説いた「ナショナリチ」nationality のことです。国民は，空間単位として国家の民であり，時間単位として文明進歩の担い手となるものです。この国家の民をひとつに結びつける絆ともいえるものが内的国境であり，国民の精神ともいえるものです。この絆が愛国心なるものを育み，危機における国民精神に火をつける原動力ともなります。明治維新で誕生した国家の民は，そのような意味での内的国境，国民として共有しうる記憶といえるようなものがいまだ確定しておらず，日本という国家意識がきわめて稀薄でした。それだけに日本という国家意識の確立が急務の課題だったのです。そのために「御一新」は,「維新」とされ,「惟神之大道」に重ねて説かれ

ねばならなかった。その成果こそは，日本人像をして，「母乳とともに飲みこんだ愛国心」の持主だとみなされる存在になさしめたのです。W.E. グリフィスは，『ミカド ── 日本の内なる力』（亀井俊介訳／ 1995年）のなかで，来日当初に見聞した日本人の国家意識を次のように証言しています。

> 新政府には金がなく，日本には実質的統一がなく，普通の日本人には真の愛国心がなかった。どこの国に生まれたかときかれれば，日本人の素直な返事は，その事情に応じて，「越前」とか「土佐」とか「薩摩」とかであった。個人的には，国家の意識は当時非常に弱かったのである。このようなばらばらの状態では，いつ内乱が起るかわからなかった。

新国家誕生時の日本には，日本人というアイデンテイテイ，日本人であるという己の存在根拠への自覚，わたしは日本人であるという思いが稀薄でした。「日本国民」なんだということを発見して自覚するのは，日清戦争に勝利した感激に酔うなかで，はじめて出てきたようです。それまでは，国といえば，私は越前だとか，薩摩とか，将軍家なのです。このような精神の祖形，オクニたる藩によせる思いは，春，夏の甲子園を見ればわかるように，いまだに日本では強くみられるわけで，「オクニ」意識こそが人心結合の絆になっています。甲子園野球が面白いのは，各県別の対抗であって，郷土の栄誉をかけた争いとみられていることです。また日本の軍隊は，「国軍」として平準化されることがなく，郷党を同じくする郷土部隊であることを強調し，戦闘能力を競わせました。かくまでに根深い「オクニ」意識をして，国家意識にまで高めていくことが急務の課題とみなされたのです。

それだけに，日本の精神的な国境，国民の精神を一つにするには何が求められるか，どのようにすればよいかという問題が問われたわけで，新国家の最大急務の課題となります。そこで伊藤博文は「我國にあって機軸とすべきは独り皇室あるのみ」と，皇室を国家の機軸とすることに想いをあ

らたとしたわけです。

この背景には，憲法制定の師であったグナイストから，「国家というものは，みんなをまとめる，ある宗教のようなものがいるのだ」，との教示がありました。「国民が，その宗教というものによって，お互いに愛し合う，知り合う，そういうことが連帯のもとになっているのだ」，「あなたの国は仏教があるのではないか」と。

そこで伊藤は，立ち止まり，日本にとり仏教や神道とは何であったかに想いをめぐらし，「我國にあっては機軸とすべきは独り皇室あるのみ」と，確信します。神の不在は，西洋諸国でキリスト教がはたした役割を「皇室」という存在に国家の根軸を託させることとなります。この想いは，1888 年 6 月 18 日に開催された枢密院の憲法審議冒頭における伊藤博文の発言「枢密院会議筆記・一，憲法草案・明治二十一年自六月十八日至七月十三日」に読みとることができます。この発言は，日本という国家，国民国家形成の根軸にかかわる世界を提示したものですので，長文ですが全文引用しておきます。

> 各位，今日ヨリ憲法ノ第一読会ヲ開クヘシ。就テハ注意ノ為メ開会ニ先チ，此原案ヲ起草シタル大意ヲ陳述セントス。但シ此原案ノ逐條ニ渉テハ今日素ヨリ一々之ヲ弁明スヘキニアラス。憲法政治ハ東洋諸国ニ於テ曾テ歴史ニ微証スヘキモノナキ所ニシテ，之ヲ我日本ニ施行スルハ事全ク新創タルヲ免レス。故ニ実施ノ後，其結果国家ノ為ニ有益ナルカ，或イハ反対ニ出ツルカ，予メ期スヘカラス。然リト雖，二十年前既ニ封建政治ヲ廃シ各国ト交通ヲ開キタル以上ハ，其結果トシテ国家ノ進歩ヲ謀ルニ此レヲ捨テテ他ニ経理ノ良途ナキヲ奈何セン。夫レ他ニ経理ノ良途ナシ，而シテ未ダ效果ヲ将来ニ期スヘカラス。然レハ則チ宜ク其始ニ於テ尤モ戒愼ヲ加ハヘ，以テ克ク其終アルヲ希望セサルヘカラサルナリ。已ニ各位ノ暁知セラルル如ク，欧州ニ於テハ当世紀ニ及ンデ憲法政治ヲ行ハサルモノアラスト雖，是レ即チ歴史上ノ沿革ニ成立スルモノニシテ，其萌芽遠ク往昔ニ発セサルハナシ。反之

我国ニ在テハ事全ク新面目ニ属ス。故ニ今憲法ヲ制定セラルルニ方テハ，先ス我国ノ機軸ヲ求メ我国ノ機軸ハ何ナリヤト云フ事ヲ確定セサルヘカラス。機軸ナクシテ政治ヲ人民ノ妄議ニ任ス時ハ，政其統紀ヲ失ヒ，国家亦隨テ廃亡ス。苟モ国家ガ国家トシテ生存シ，人民統治セントセハ，宜ク深ク慮ツテ以テ統治ノ效用ヲ失ハサラン事ヲ期スヘキナリ。抑欧州ニ於テハ憲法政治ノ萌芽セル事千余年，独リ人民ノ此制度ニ習熟セルノミナラス，又タ宗教ナル者アリテ之ガ機軸ヲ為シ，深ク人心ニ浸潤シテ人心之ニ帰一セリ。然ルニ我国ニ在テハ宗教ナル者其力微弱ニシテ，一モ国家ノ機軸タルヘキモノナシ。佛教ハ一タヒ隆盛ノ勢ヒヲ張リ上下ノ人心ヲ繫キタルモ，今日ニ至テハ已ニ衰替ニ傾キタリ。神道ハ祖宗ノ遺訓ニ基キ之ヲ祖述ストハ雖，宗教トシテ人心ヲ帰向セシムルノ力ニ乏シ。我国ニ在テ機軸トスヘキハ独リ皇室ニアルノミ。是ヲ以テ此憲法草案ニ於テハ専ラ意ヲ此点ニ用ヰ，君権ヲ尊重シテ成ル可ク之ヲ束縛セサランコトヲ勉メタリ。或ハ君権甚タ強大ナルトキハ濫用ノ慮ナキニアラスト云フモノアリ。一応其理ナキニアラスト雖モ，若シ果シテ之アルトキハ宰相其責ニ任スヘシ。或ハ其他其濫用ヲ防グノ道ナキニアラス。徒ニ濫用ヲ恐レテ君権ノ区域ヲ狭縮セントスルガ如キハ，道理ナキノ説ト云ハサルヘカラス。乃チ此草案ニ於テハ，君権ヲ機軸トシ，偏ニ之ヲ毀損セサランコトヲ期シ，敢テ彼ノ欧州ノ主権分割ノ精神ニ拠ラス。固ヨリ欧州数国ノ制度ニ於テ君権民権共同スルト其揆ヲ異ニセリ。是レ起案ノ大綱トス。

この「皇室あるのみ」との確信こそは，神が不在な日本において，天皇，万世一系の皇統につらなる天皇を神に代替しうる器とみなし，国民精神の拠り所に造形していくことだとの思いになったものです。

5-2　大日本帝国憲法の枠組

そこで天皇を国家の根軸と位置づける思いは，天皇の統治権の絶対性を説いた大日本帝国憲法第１条「大日本帝国は万世一系の天皇之を統治す」

に結実し，第6条以下に規定された強大な権力を天皇大権として天皇に与えることとなりました。しかし天皇は，その権力がいかに強大だとしても，第4条に「天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ此ノ憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ」とあるように，君主といえども憲法に規定された範囲を超える権力の行使が出来ないように君権を「憲法の条規」に封じ込めたという意味で，専制君主とは異なります。それは，伊藤にとり，「抑憲法ヲ創設スルノ精神ハ第一君権ヲ制限シ第二臣民ノ権利ヲ保護スルニアリ」（「枢密院会議筆記・一，憲法草案」）とみなされていたからにほかなりません。ちなみに，第1条と第4条の矛盾ともいうべき関係は，憲法および皇室典範を「皇祖皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述」（「告文」）したものと位置づけることで，解消しました。

しかし，天皇が「戦ヲ宣シ」（第13条），その戦に敗れたりすれば，当然天皇に政治的な責任が生じかねません。そのため，「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」との第3条で天皇無答責を宣言し，「国務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責ニ任ス」（第55条）と規定することで，国務各大臣に大権行使の責任を負わせたのです。

いわば大日本帝国憲法は，天皇を「神聖にして侵すべからず」という存在だとなし，政治的責任を負わない，あくまで国家の内部機関だと位置づけ，最初から天皇を神格化したなんて話ではない。天皇という存在は，日本国民という意識を形成していく上での国民が共有する記憶の源泉，国民を一つにしていく器になれば良いとみなされていたにすぎません。それを目指しての国民育成がはかられていったのです。

5-3　天皇という存在

しかし「天皇」という存在は，帝国憲法が「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と説きましょうとも，御一新の時代に生きる庶民に広く知られた存在ではありませんでした。民衆は「天子様」という存在があるようだということは何か漠然とわかっていたのですが，実体としての天皇については具体的にイメージすることができなかった。「天皇」なる存在は，「ミカド」

「御所」「内裏」等々で表現されていますように，ある特別な方がいる場所の誰かぐらいにしかみなしていなかった。外国人宣教師は，そのような存在である天皇のことを，「宗教的神聖君主」The religious Holy Emperor とみなしていました。

ちなみに「天皇の国」が成立したことは，1868年（慶応4）年戊辰正月十日「条約書等天皇の称を以てすへき旨を各国公使に告くるの詔」で徳川慶喜の政権返上によって「内外政事親裁」となり，「従前条約　雖用大君名称　自今而後　当換以天皇称」と，「大君の国」から「天皇の国」になったと諸外国に伝えられました。

ついで3月14日「五箇条の誓文」とともに出された「億兆安撫　国威宣揚ノ御宸翰」は，新国家の統治者たる天皇の想いを「今日ノ事，朕自身骨ヲ労シ，心志ヲ苦メ，艱難ノ先ニ立」と宣言し，「治蹟を勤メテコソ始テ天職ヲ奉ジテ億兆ノ君タル所ニ背カザルベシ」と負うべき天皇の政治的主体性を強調します。しかし天皇は，統治の前途に対し，「今日朝廷の尊重は古へに倍せしが如くにて朝威は倍衰へ上下相離るゝこと霄壤の如し　かゝる形勢にて何を以て天下に君臨せんや」と，高らかに「億兆安撫　国威宣揚」を宣言したものの，統治の前途に不安をいだいていました。

そのため政府は，その存在を天下に知らせ，新国家の統治者である天皇の権威をたかめる諸策を展開します。かくて帝国憲法発布ぐらいまで,「天皇」は，国見をする巡行によって，その存在を国民に広く曝し，「天子様」の様々な相貌を町や村里の住民に知らせたのです。さらに行幸した場所では，天皇が常緑樹である松を植樹するなど，記念品を始め酒やたばこ，菓子等々の類を住民に賜与することで，民心を蠱惑していきました。この記念の木は「御幸松」などと呼称され，行幸をめぐる各種の記念の場所などが後に「聖蹟」と位置づけられ，天皇をめぐる記憶を追体験する場となり，天皇の物語を増幅し，「天皇神話」を紡ぎ出す器となっていきます。

明治天皇は，帝国憲法発布後，それまでの6大巡行 ── 1872年近畿・中国・西国巡幸，1876年東北（福島，仙台，盛岡，青森）・函館巡幸，78年北陸・東海道巡幸，80年中央道（山梨・三重・京都）巡幸，81年山形・秋

田・北海道巡幸，85年山陽道（山口・広島・岡山）巡幸 ── にみられるような，列島をめぐる旅で各地の政情と民情の視察をする国見に出ることがなく，帝国議会の開院式，これはいまでも行われているよね。それから大元帥として陸海軍の大演習，陸軍大学校卒業式などの軍学校に行幸するとともに，天皇の官吏を養成する帝国大学の卒業式など，限られた所にしか行かなくなる。かくて宮中の奥深くに入り，その相貌が国民に曝さなくなってくるわけ。その代わり，民を思う天皇の気持ちは歌，御製に託して伝えられました。まさに天皇は神秘の帳の奥深くに入っていき，その存在が神聖化されていくわけです。いわば帝国憲法の第3条が説く「神聖」というのは当初から天皇を神格化としたものではありません。「神聖天皇」像は，国家が閉塞感に閉ざされていく状況下，「神秘」の帳に封印されていた虚器をして，危機の時代がその存在を強調する言説で生み出され，独り歩きしていったものです。

このような日本近代の造形の仕方は，ヨーロッパの諸制度のなかで使えるなとみなされた政治機構がもつ諸機能を「文明の枠組」として分節化し，選別改変して選択的に受容する，機能合理主義的価値判断ともいうべき方策でないでしょうか。かかる作法こそは，日本がアジアで最初に「憲法政治」，立憲君主国になしえたのです。当時，西洋諸国でも憲法がない国がある時代に，こんなに早く議会ができて，憲法を持った国もない。さらに，男子の普通選挙法にしても，敗戦後になるが男女平等の選挙権にしても，ヨーロッパとくらべてみても早いほうです。

要するに，機能合理主義的価値判断による選別的受容と改変の成果が日本の近代だった。そのとき明治国家は，「文明」という大義を掲げたわけですが，西洋文明の精神的な原器になっているキリスト教に充当しうる何かをつくらねばならず，その代替物として天皇という存在を国民の精神的原器とすることで内的国境をつくろうとした。ここで問われたのが日本の国のかたち，在り方とは何かということ，天皇が国の原器だという歴史をどのように国民の身心に埋めこんでいくかということです。日本の歴史はどのように創られ，説かれたのでしょうか。

5-4　国体に基づく国家至上の教育を

維新当初の学校では，西洋の規範をかたる文明史としての「万国史」，世界史を教えていたのであり，日本の歴史がありませんでした。この開化の教育は，ウイルソンリダーのようなアメリカの教科書を翻訳したものを使用し，「文明」の知識をつめこむ知育重視だとして批判されます。日本の歴史は，中学校で教えますが，頼山陽の『日本外史』などです。このような教育は，1880年代に「維新以来教育之主旨定まらす国民之方向殆んと支離滅裂」だと批判され，学校教育に徳育が求められることになります。1881年（明治14）の小学校教則綱領は，「小学校教員心得」として，尊皇愛国の精神に貫かれた「熟練」「懇切」「黽勉」という徳を要求しました。

北海道では，このような状況に応じ，1883年に函館県小学校教則が「歴史は中等科に至りて之を課し，日本歴史に就て建国の体制，神武天皇の即位，仁徳天皇の勤倹，延喜天暦の政績，源平の盛衰，南北朝の両立，徳川氏の治績，王政復古等緊要の事実，其他古今人物の賢否風俗の変更等の大要を授くるへし，凡そ歴史を授くるには務て生徒をして沿革の原因結果を了解せしめ，殊に尊皇愛国の志気を養成せんことを要す」となし，札幌県師範学校規則は「尊皇愛国の志気を振興し忠孝節義の風尚を涵養せんことを要す」と宣言しております。

日本の歴史は，神武建国にはじまる「天皇の国」の歩みだとして，「尊皇愛国の志気」を養成する課題を負わされたのです。この課題は，1885年の内閣制度発足による初代内閣総理大臣伊藤博文の下で文部大臣となる森有礼によって方向づけられます。森は，薩摩藩出身で藩命によって英米に留学，帰国後に新政府の開明派として活躍，明六社の結社に参加，米国滞在中に英文で「信教の自由」を提言した開明派の人物でした。森は，混迷している教育の現状に対し，日本のあるべき教育の方向を直轄学校長に「諸学校を維持するも畢竟国家の為なり，学政上に於ては生徒其人の為にするに非ずして国家の為にすることを始終記憶せざるべからず」と説示します。ここで提示された教育の課題は，森文相が閣議に図った教育主義の根本に関する意見書（1887年）に直截に表明されており，忠君愛国の志によって

一国富強をめざす国民の養成をめざすもので，以後の日本の教育の原点となります。

> 今夫国の品位をして進んで列国の際に対立し以て永遠の偉業を固くせんと欲せば国民の志気を培養発達するを以て其根本と為さゝることを得ず。我国万世一王天地と共に極限なく上古以来威武の輝く所未だ曾て一たひも外国の屈辱を受けたることあらす。而して人民護国の精神忠武恭順の風は祖宗以来の漸磨の陶冶する所未た地に墜るに至らす。是即ち一国富強の基を成すか為に無二の資本至大の宝庫にして以て人民の品性を進め教育の準的を達するに於て他に求むることを仮らさるへきなり。蓋国民をして忠君愛国の気に篤く品性堅定志操純一にして人々怯弱を恥ち屈辱を悪むことを知り深く骨髄に入らしめは精神の嚮ふ所万波一注以て久しきに耐ゆへく以て難きを忍ふへく以て協力同志して事業を興すへし。督責を待たすして学を力め智を研き一国の文明を進むる者此気力なり。生産に労働して富源を開発する者此気力なり。

日本の教育は，国家のためにするものであって，生徒その人のためにするものではないという方針です。日本国民は，「万世一王，天地と共に極限なく」と万世一系の皇統の国であるということを根本にすえた教育によって，国民の志気を培養し，品性を高め，「一国の文明」を進めるに相応しい気力を充実させ，国家を富強にするための富源開発をなす使命が負わされました。

国家の文明化には国民精神の確立が問われているとの意見は，森有礼に先立ち，敬宇中村正直が「泰西人の上書に擬す」として明治天皇に提出したものにもみることができます。中村正直は，幕府の昌平坂学問所の教授，66 年に幕臣として渡英，帰国後に将軍家に従い静岡藩の学問所教授，敗残の幕臣を励ますべくサミュエル・スマイルスの *Self-Help* を『西国立志編原名自助論』（1878 年）として著し，明六社同人としても活躍，私塾同人社

を経営します。同人社では，カナダメソヂスト教会の宣教師による聖書の講義がなされており，敬宇はキリスト者となります。上書は，泰西人・西洋人の言葉に託し，天皇に国家を富強にしたいのならキリスト教を受け入れなさい，と説いたものです。

> 陛下其れ西国の富強なる所以を知るか。夫れ富強の原は国に仁人，勇士多きに由る。仁人勇士の多く出づる所以は，教法の信心，望心，愛心に由るに非ざる者莫し，西国の教法を以て精神と為し，此を以て治化の源と為す

国が富強となるには仁人勇士が必要であり，その心を支えているのは教法が産み出す信心，望心，愛心であると。この「信心」「望心」「愛心」は，パウロがコリントの信徒への手紙で説いた「信仰と，希望と，愛」(コリントⅠ　13･13)という信仰のメッセージを述べようとしたものです。「教法」というのは宗教のことです。まだ宗教という語が登場していないことによります。宗教の信心というものを持っていくことが大事だというわけです。かく天皇に日本を文明富強の国にするためには西洋文明国を支えている教法キリスト教を受け入れなさいと問いかけたのです。

森有礼は，日本の国民精神として，中村が説くイエスの教えではなく，万世一系の天皇の国という歴史のなかに精神の根拠を求めることで，「天皇の国」に相応しい刻印を身体に埋め込み，精神の造型をめざしていきます。万世一系の天皇という存在こそが，一国を富強となす国民精神をたかめ，その活力を生み育てる原器となるのだと説いたのです。まさに日本国の内的国境としての国民精神確立への方途はここに方向づけられました。

国家の枠組は，1889年2月11日に発布された大日本帝国憲法と皇室典範で確定され，国家の精神的規範が90年10月30日の「教育ニ関スル勅語」(教育勅語）で提示されました。この勅語拝礼をめぐり91年1月に内村鑑三の「不敬事件」が世間を騒がせました。内村は，「不敬漢」として国内に身を置く場を見出せず，流竄の日々にさらされるなかで，キリスト者たる

己の場を確かなものとしたのです。11 月には，文部省が御真影と教育勅語の謄本を「最も尊重に奉置」するようにとの訓令を出しました。ここに教育勅語と御真影は，神聖視され，国民教育の原点とみなされ，国民精神を規定する外的枠組となり，日本人の心を呪縛していきます。

5-5　日本国民たる自覚 ── 愛国心の在り方

ここにめざされた教育は，日清戦争が勝利するなかで，国民の心に日本人であるとの思いを根づかせることとなります。清国に勝利したことは，中華文明の圧倒的な影響下で歴史を刻んできた日本人をして，「シナ」に代わり日本がアジアの覇者であるとの思いをつのらせることとなったのです。

日本は，清国 ──「シナ」を中華文明の国として畏敬し，その圧倒的な影響下で文化を形成してきました。日本にとり身の周りに在る世界は，中国の三国志や水滸伝などの英雄譚の主人公が祭りの山車になっているように，圧倒的な中華文明の枠組みのなかに封じ込められていました。それだけに当時の人たちは大清国と戦争して大丈夫かなと思った。日本の歴史は，信長をはじめとする武將たちの国取り物語の世界をして，中国の戦国時代になぞらえて「戦国時代」という呼称で描いている。

まさに圧倒的な中華文明の影響下にあった文化的な環境，認識の枠組みの中で「シナ」との戦争をしたわけです。それだけに，清国に開戦したときに何が起こったかというと，「日本国民」なのだという自覚，国民意識が出るわけです。会津藩士井深梶之助，横浜のヘボン塾でキリスト者となり，日本基督教会の牧師，明治学院総理となった人物は，1894 年夏に京浜キリスト教女学校生徒が集まった横浜女子夏期学校での講演「社会改良の前途に就いて」で，日清戦争でめざめた国民精神の激発が「愛国心の大発達」をもたらしたと述べています。

> 第一に国民的精神の発達（略）夫れ人は他あるを知りて始めて己あるを知るが如く，国民も亦他国あるを知りて始めて自国あるを知るなり。

試みに王政維新前のことを想いみよ。非凡の学者は格別，通常の人は己の生国又は藩あるを知りて，日本国又は日本国民なるものあるを知らざりき。現に余輩の学校に在る時に日本国民と云う詞を聞きたる覚えなし。只常に耳にしたる所のものは，江戸将軍家，薩摩，土佐，鍋島，尾州，紀洲，水戸，越前等と云う名称なり。成る程偶には，日本，唐土，天竺等の語を耳にせざるに非ざれども，実に茫々漠々として雲をつかむ如き考えなりき。実に余輩は会津藩士たる我なるを知りたれども，日本国民たる我あるを知らざりしと云いて可なり。(略) 況んや愈々今回の戦争にして我が帝国の大勝利に帰するに於ては，此の国民的精神即ち愛国心の大発達を見るや疑いなし。

井深はかく言うわけですね。「己の生国又は藩あるを知りて，日本国又は日本国民なるものは知らざりき」と。井深のように，ヘボンのところで英語を学んだ人においてすら，「日本国民」だという自覚はなかったが，日清戦争の中で，初めて「日本国民」「日本人」だということに気付くわけです。日清戦争で「我が帝国の大勝利」こそは「国民的精神即ち愛国心の大発達」をもたらしたのだと。いわば戦争に勝利する中で，あぁ，わしは日本人だ，日本国民だ，と初めて思った。これが当時の日本人の一般的な一つの姿だったわけです。

己の生国や藩しか知らないのは日本列島で話されている言葉がそれぞれのオクニことばであったことにもみることができます。列島を旅して，領域を越えて他の地域，藩（クニ）等々に行くと言葉が通じないという状況がありました。各地域には固有の話し言葉，「オクニことば」，後に「方言」といわれるものがあり，他所者には通じなかった。そのため，他所者同士の会話では謡曲の節回しで語ることで通じたともいわれています。北海道の移住者は，全国から来ているだけに，当初話を謡曲のようにしたのだと老人がかたっています。日本を一元的な国家にするには列島が共有しうる共通のはなし言葉，標準語とも言えるものをつくらねばならなかったのです。

まさに列島を一つの国家にするには，このオクニことば，「方言」といわれることとなる言葉を全国どこでも通じる標準語，日本語を「国語」に改鋳していかなくてはならない。この作業は日本を一個の国家にする上での必須のことです。それは国家の内的国境を画定することにほかなりません。そのような中で，日本語を国家の言語に造形しなおすという課題，国語という問題が出てくる。

5-6 「国語」の造型

国語と日本語ってどう違う？　同じ？　国語と日本語っていうのは，同じなのかね。違うのかね。いま学校では国語だよね。

生徒「国語の中に日本語が入ってるんじゃないですか？」

国語の中に日本語が入っている。ほう。優れた回答。大学では，国文学科があるのに日本語学科もあるよね。その日本語って，何なのかな。

いま受験科目の国語っていうと，何と何が入ってる？　授業でいうと，現代文，古文，漢文になってるのでは。ここがミソだね。実は日本語というのは，平安以前までは書き言葉は漢字，中国の文字，漢字だった。漢字を使えることが公に仕える人，公家などには必須だった。平安朝にひらがなが出てきて，いろんな情緒的なものが書けるようになった。しかし，公的な世界，男の世界は漢字で，漢字が正しい書き言葉。かな文字は「仮名」と仮の文字でしかなく，女のもの。

明治維新以後は外国語の表記をカタカナでするカタカナ語が入ってくるわけね。だから，そういう意味で言うと，日本語というのはカタカナ語とひらがな語と漢語。だから，高等学校の国語が古文，漢文，現代文という科目になっているのは，それなりに意味あるわけね。漢語は書き言葉で西洋で言うとラテン語に相当する。漢語の素養，漢詩への造詣が知識人の証，教養の有無を示すものとみなされてきた。

じゃあそうすると，国語というのは何なの？

生徒「国家の言語が「国語」か？」

そう，これと通じる問題が歴史にも見られるよね。現在は「日本史」だけれど，戦前は「国史」。大学の講座は東大・京大を筆頭に戦後も「国史学科」。東京教育大学は，いち早く国史をやめて，「日本史学科」とした。東京大学は最近に「日本史」にしたようですが，京都大学はいまだに「国史」でないかな。国史の枠組と日本史の枠組は違いますよ。「国史」なる概念には国家的規範で歴史を把握しようとの想いが託されている。

「国語」なる概念にも国家の規範が鋳込まれています。「日本語」は，諸言語の一つとして，外国人に教授するものだとみなされいるようです。そこで国語にこめられた思想をみておきます。国語の造型に大きな役割をはたしたのは上田万年です。上田は，1894年（明治27）の日清戦争における初戦の勝利をふまえ，哲学館（現東洋大学）の講演「国語と国家と」で，「日本語は四千万同朋の日本語たるべし。僅々十万，二十万の上流社会，或は学者社会の言語たらしむべからず。昨日われわれは平壌を陥れ，今日又海洋島に戦い勝ちぬ」と雄叫びをあげ，高い戦意高揚意識の中で，国民を一体にする国語の造型こそが国家にとり急務の課題だと説き，「国語は帝室の藩屏，国民の慈母，国民の血脈」だと位置づけています。

まさに日本国民が精神的に一つになる，その紐帯をになうもの，精神的国境を確乎たるものにするには，日本列島の住民が共有しうる言葉である「国語」が求められたのです。ここに東京の話し言葉を標準に「国語」の造型がはじまり，標準語に会わない地域的な話し言葉を「方言」とみなして，学校教育の場で「方言札」等を用いた方言使用者を処分するなど，方言の排除撲滅を推進していきます。国語教育の課題は，方言撲滅であり，方言を使うのを恥ずかしいという意識をうえこむことでした。このような「国語」への過剰な思いこみは，「国語の力」（1937年「小学国語読本」巻9，1942年「初等科国語」）が位置づけていますように，国語を「国民の魂の宿るところ」との言説に表明された世界にほかなりません。

ねんねんころりよ，おころりよ，
ぼうやは好い子だ，ねんねしな。

誰でも，幼い時，母や祖母にだかれて，かうした歌を聞きながら，快いゆめ路には入つたことを思ひ出すであらう。此のやさし歌に歌はれてゐる言葉こそ，我がなつかし国語である。

君が代は千代に八千代にさゞれ石の
いはほとなりてこけのむすまで

此の国歌を奉唱する時，我々日本人は，思はず襟を正して，栄えます我が皇室の万歳を心から祈り奉る。此の国歌に歌はれたてゐる言葉も，また我が尊い国語に外ならない。

我々が，毎日話したり，聞いたり，読んだり，書いたりする言葉が，我々の国語である。我々は，一日たりとも，国語の力をかりずに生活する日はない。我々は，国語によつて話したり，考へたり，物事を学んだりして，日本人となるのである。国語こそは，まことに我々を育て，我々を教へてくれる大恩人なのである（略）

我が国は，神代このかた万世一系の天皇をいただき，世界にたぐひなき国体を成して，今日に進んで来たのであるが，我が国語もまた，国初以来継続して現在に及んでいる。だから，我が国語には，祖先以来の感情・精神がとけこんでをり，さうして，それがまた今日の我々を結び附けて，国民として一身一体のやうにならしめてゐるのである。若し国語の力によらなかつたら，我々の心は，どんなにばらばらになることであらう。してみると，一旦緩急ある時，国をあげて国難におもむくのも，皇国のよろこびに，国をあげて万歳を唱へるのも，一つには国語の力があづかつてゐるといはなければならない。

国語は，かういふ風に，国家・国民と離すことの出来ないものである。国語を忘れた国民は，国民でないとさへいはれてゐる。

国語を尊べ。国語を愛せよ。国語こそは，国民の魂の宿る所である。

かく「国語」が問い語る世界は，日本列島が共有しうる標準的日本語で

ある以上に,「神代このかた万世一系の天皇をいただき，世界にたぐひなき国体」を体現した言語とみなし，この皇国を担うにたる「今日の我々を結び附けて，国民として一身一体のやうにならしめてゐる」ものと位置づけられ,「国語を尊べ。国語を愛せよ。国語こそは,国民の魂の宿る所である」と高らかに宣言されたのです。まさに「国語」は，万世一系の天皇の下にある国家の民の精神を規定するものにほかならず，内的国境の要として，天皇という物語を紡ぎ出す語りの器でもあったといえましょう。

このような「国語の力」に昇華された世界こそは，日本人の愛国心の肥沃な土壌にほかならず，外国人を困惑させました。東北学院の創設者の一人である宣教師のホーイは,「日本人の「愛国心」なるものは確かに病的で,「我が国」というかの病的な一句が,「われらの父なる神の御国」よりも，もっと包括的なのか」(1891年6月6日付書簡）と，キリスト者青年に刻印されている「愛国心」の激烈さに辟易しています。日本のキリスト者は，同志社の創立者新島襄にみられたごとく，愛国心の発露としてのキリスト教であり，信仰だったのです。かかる愛国の情をキリスト者として先鋭に問いかけ，己の信仰世界を構築した一人が内村鑑三です。

5-7　内村鑑三に見る日本

山路愛山は，1989年（明治22）の天長節における東洋英和学校（現麻布学園）での内村鑑三の講演を「菊花演説」と紹介し，内村がいかに愛国者であるかを説いています。

> 明治廿二年の天長節に於て余は麻布の東洋英和学校に於て内村氏の演説をききたり。当時彼は其演壇を飾れる菊花を指して曰ひき，此菊花は自然が特に日本を恵み足るものゝ一なり。菊は実に日本に特有する名花なりと。彼れは更に声を揚げて曰く，諸生よ，窓を排して西天に聳ゆる富嶽を見よ。是れ亦天の特に我国に與へたる絶佳の風景なり。されど諸生よ記せよ，日本に於て世界に卓絶したる最も大なる不思議は実に我皇室なり，天壌と共に窮りなき我皇室は実に日本人民が唯一

の誇とすべきものなりと。其粛々たる態度と其誠実を表はして余ある容貌とは深く聴者の心を動かしたりき。彼れは科学者なり。彼れは泰西の文学に就いて多くの興味を有するものなり。されど彼れは愛国者なり。当時の彼れは聖書とシェーキスピーアと太平記とを愛読せり。彼れは太平記を愛し勤王の精神に焚ゆることに於て醇乎として醇なる日本人なり。保守党なり。されど彼れは不思議にも保守的反動の犠牲となれり。（山路愛山『基督教評論・日本人民史』1966 年）

内村鑑三は，「日本に於て世界に卓絶したる最も大なる不思議は実に我皇室なり，天壌と共に窮りなき我皇室は実に日本人民が唯一の誇とするものなり」，と語りかけています。愛山は，この言説を紹介し，不敬事件で糾弾され流竄の旅に追いやられて内村鑑三こそ，聖書とシェークスピアと太平記を愛読し，「勤王の精神」に燃えた愛国者なのだと説いたのです。

内村は，先に紹介した楠公に寄せる想いにもうかがえますように，愛読書の一つが太平記であり，西行でした。西行の「願わくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ」に心ひかれる日本人です。このような日本的心情に共鳴する心のありかたこそは，日本人キリスト者内村鑑三の原初的心情ともいえるもので，愛国者内村の信仰世界を豊かに実らせた磁場となったものです。

ここにみられる愛国心なるものは，ホーイに「病的」といわしめたものに通じる世界でもありますが，日本に生まれ育った者がとらわれた世界そのものです。かく問われる愛国心，骨の髄まで侵された皇国的愛国心の培養器は小学校でした。

5-8　小学校『読本』が問い語る世界

小学校の教育，国語読本は，日本の国の容，皇国の物語を多様に説き聞かせています。1900 年（明治 33）の坪内逍遥の手になる金港版『尋常国語読本』の「天長節」は，「天皇陛下」の掛軸を仰ぎみて一家が着座している挿絵をそえて，天長節の謂れを説いたものです。

この家の床の間には，今上天皇陛下と書いてある掛物をかけ，その脇の花いけには美しい菊の花をさしてあります。一家の者どもはみな床の間の前にかしこまり，主人は少し進み出て，丁寧におじぎをして居ます。これは，今日は天長節といって，いまの天子様のお生まれあそばした日であるから，一家こぞってお祝いを申上げて居るのであります。これから親子もろともに天長節の歌を歌い，それからまた親類，友達を招いて，この日を楽しく暮らすでありましょう。

今日の　よき日は，大君の，生まれ　たまひし，よき日なり。
今日の　よき日は，御光の，さし出　たまひし，よき日なり。
光　あまねき，君が代を，祝へ　もろびと，もろともに。
めぐみ　あまねき，君が代を，祝へ　もろびと，もろともに。

この挿絵は，神武天皇からの天皇の系図とか，明治天皇，あるいは明治天皇と皇后美子を描いた天皇に関わる掛軸等が広く流布され，御真影を神棚や仏壇のそばに掲げた家の光景が広くみられるようになる背景をうかがわせます。かつ一家の着座は，床の間に向い，お父さんが着座，その背後にお母さん，子どもの順に並び，父の斜め後ろにおじいさん，おばあさんが並ぶという構図です。隠居した祖父母が家長である父の背後に座しているなかに，家父長権の継承が暗示されている。かつ父が「天皇陛下」という掛軸に向い座礼しているわけで，父権が天皇に依って権威づけられていることを示唆します。いわば一家の在り方は，遠く天皇に連なる，天皇を巨大家（キョダイイエ）とする，その末裔にある小家（コイエ）からなる綜合家族主義の国柄を示唆するもので，日本の家を表示したモデル的な構図にほかなりません。

天長節の歌「今日のよき日は，大君の，生まれたまひし，よき日なり」のメロディーは讃美歌の借用です。日本の小学唱歌のかなりのものが讃美歌のメロディーを借用している。小学唱歌は，お雇い外国人のメーソンが指導したこともあり，アメリカで広く歌われていたものが参考にされたからです。そういう意味で言えば，「きょうの良き日は大君の」というのは，

「きょうの良き日はイエス様の」とか，「きょうの良き日は大神」のとやってみれば，いくらでもキリスト教的な世界に重なってくるわけだ。このような小学唱歌で育ったわけだから，讃美歌の世界で出会った「御国」とか「イエス」は，何時でも「皇国」「天皇（オオキミ）」になりうるわけで，ホーイが歎いたように，「我が国」という言説が「われらの父なる神の御国」よりも優位性を占めたように，「確かに病的」な「愛国心」に犯されたとしても不思議ではないのです。

このような「愛国心」のありかたこそは，嘉永癸丑の衝撃で「攘夷」に表明されたナショナリズムにとりこまれて生きた日本人の心に鋳込まれた世界であり，キリスト者とてそこから自由ではなかったのです。まさに「母乳とともに飲みこんだ愛国心」という病にどのように向き合うかが問われるのです。それは，「愛国心」を言葉で否定する，拒否すればすむことではなく，心に鋳込まれた傷痕を見つめて解析して行くことでしか解けないのではないでしょうか。

しかし，世間では，とくにキリスト教界の一般的風潮は，「愛国心」を私が主語で問い質すことなく，「愛国心」云々の言説を「反動」とか「保守」等々なる言辞で抹殺してことたれりとする作法が目につきます。これでは足下をすくわれるだけではないだろうか。そこでさらに，もう一つの日本の愛国心が何を術に説かれたかを読み解きます。

「日ノ丸ノハタ」の挿絵は，2本の旗を交差させて，こういうふうに飾りなさいよと教えている。いまでも日めくりカレンダーの祝祭日には，こういう旗が載っているね。ここで「日の丸」が提示する世界は，金港堂版『尋常国語読本』で次のように説かれている。日の下，日本は太陽の出る所，万物の根本を成す国だとの想いにほかなりません。

> そもそも日の丸の旗は，世界をてらして居る，日にかたどって作ったもので，甚だあざやかで，そのうえ，まことに勇ましく見えます。外の国々の旗には，鷲という鳥や獅子という獣などをつけたのもありますが，あざやかで勇ましいのは，我が国の旗に及ばないよーです。

さらに『読本』は，このような国のかたちを，「紀元節」で「万世一系」の皇統の国と教え諭します。

> 此の日は，古き昔，神武天皇と申す天子様が，あちらこちらの悪者をお退治あそばして，始めて天子様に御なりなされた日であります。神武天皇様は，我が国第一代の天子様で，今の天子様は百二十二代目の御孫でございます。我が国のよーに，天子様の御血筋が幾年も一筋で，限りなく続くのは，何よりめでたいことであります。

小学児童は，このような天皇の国だという言説に重ね，この皇国への忠誠こそが国民の務めだということを折りにふれて説き聞かされたのです。そこでは，国語読本が読み解く語り以上に，小学唱歌の世界が大きな役割をはたしていたのです。その最たる唱歌は，楠正成父子の別れを歌う「青葉茂れる櫻井の……」で，紀元節や天長節の歌が祝祭日に歌われたのに対し，「櫻井の訣別」が広く日常的に人口に膾炙しました。楠公ほど唱歌の題材となった者はありません。楠木正成親子の事績は少年が口にする歌によって子供心に沈潜していったのです。

ここに唄われた天皇への忠誠心は，国家のために生命を差出すことこそが，国民の聖なる義務とする物語として説かれました。日露戦争の勝利を受けて1910年から使用された第2期国定教科書「小学国語読本」巻11の「出征兵士」は，このような国家の姿を，直截に問い語ったものです。なお，義務教育年限は1908年から6年に延長されました。

> 行けや行けや，とく行け，我が子。
> 老いたる父の　望は一つ。
> 義勇の務，御国に尽くし，
> 孝子の誉，我が家にあげよ。
>
> さらば行くか，やよ待て，我が子。

老いたる母の　願は一つ。
軍に行かば，からだをいとへ。
弾丸に死すとも，病に死すな。

うれし，うれし，勇まし，うれし。
出征兵士の　弟ぞ，我は。
兄君，我も後より行かん，
兄弟共に敵をば討たん。

親に事へ，弟を助け，
家を治めん，妹我は。
家の事をば心にかけず，
御国の為に行きませ，いざや。

さらば，さらば，父母，さらば。
弟さらば，妹さらば。
武勇のはたらき，命ささげて
御国の敵を討ちなん，我は。

勇み勇みて　出行く兵士。
はげましつつも　見送る一家。
勇気は彼に，情は是に，
勇まし，やさし，ををしの別。

この「出征兵士」を見送る風景をみてどのように思いますか。どういう気がする？　これを小学校６年生の前期で習うわけ。小学校を卒業すれば，やがて徴兵され，戦地に出征することになる。兵隊として国家のために生命を捧げる覚悟が親子兄弟の想いに重ねて描かれている。「軍に行かば，からだをいとへ。弾丸に死すとも，病に死すな」，と問いかける母の気

持ちはどんなだろう。ここに説かれた世界は，70年前までの日本の現実，日本の家族が目にした風景だったのです。

このような風景は1945年（昭和20）の敗戦で消えたのだろうか。「老いたる母の　願は一つ。軍に行かば，からだをいとへ。弾丸に死すとも，病に死すな。」は，「会社に行かば　からだをいとへ。仕事に死すとも　病に死すな」とすれば，経済大国日本をささえた「企業戦士」の世界になるのでは。日本の企業風土には，「過労死」にいたるまで働く，働かせる風潮が根強くあります。いまだ日本社会には「仕事に死すとも　病に死すな」なる言説が横行しているのではないでしょうか。かかる精神風土は，学校教育もさることながら，忠臣蔵等々の語り聞かされてきた巷の物語を通して，広く国民精神に刷り込まれたものにほかなりません。

5-9　復讐するは我にあり ――「忠臣蔵」と「臥薪嘗胆」教育

年末のテレビには必ず「忠臣蔵」の古い作品が繰り返し放映されるよね，いまでも。忠臣蔵というのは，播州赤穂藩の大石良雄らの「赤穂浪士」一党が三河吉良の領主，高家筆頭の吉良上野介義央に復讐する物語。ここ小国を統治する上杉米沢藩は藩主が上野介の子供だったがため，大石の敵役として描かれているよね。

勅使接待役の赤穂藩主浅野内匠頭長矩は，江戸城で吉良上野介義央に刃傷に及び，即日切腹，改易を命じられた。ここに国家老大石良雄の下に結集した旧赤穂藩士は，喧嘩両成敗という武家法が無視されたとして，主君の仇として吉良邸に乱入，義央の首を取りました。この事件は，主君の仇を討ちとった「義挙」として，巷の人心を揺るがせ，近松門左衛門が「碁盤太平記」として描き評判をとり，竹田出雲が「仮名手本忠臣蔵」に集大成し，「忠臣蔵」として語りつがれていきました。まさに「忠臣蔵」が提示した世界には，「武士道」に凝結された儒教的名分論を大義として掲げた江戸将軍家が依拠した支配イデオロギーの盲点を衝く行動であったがため，世上人心が「義挙」とみなして呼応したのです。世間は，この仇打行為に，閉塞感がただよう時代の闇を突破しようとする気分を見出したのです。

明治天皇は，江戸に東幸する途次，1868 年（明治元）11 月に勅使を大石良雄等の墓がある泉岳寺に差遣，「固く主従の義を執り，仇を復して法に死す。百世の下，人をして感奮興起せしむ。朕深くこれを嘉賞す」と讃え，新国家の寄るべき場を天下に示しました。そこには，主君に忠誠を誓いその仇を討った行為を肯定することで，天皇たる己への忠誠の在り方を提示しようとの想いが託されていました。

まさに「忠臣蔵」一件は，幕府批判と見なされていたものをして，天皇への忠誠心を体現した物語に置き換えられたのです。「主従の義を執り，仇を復して法に死す」という忠誠心の在り方こそは，天皇への忠誠心の極致とみなされ，国民に広く求められる「忠義」の範とされたのです。

内村鑑三は，このような忠誠心の在り方を，十字架で死んだイエスへの忠誠心に連なるものだとみなし，キリスト者たる己の信仰心を語っています。大石良雄が主君に忠実なる義を表わしたように，イエスに忠誠を誓うのがキリスト者だというわけです。いかに内村鑑三が大石等の「義挙」に心ひかれていたかは，楠公楠木正成に寄せる想いに連なるものです。この想いこそは，渡米後に最初に働いたエルウェン時代の同僚が 1921 年（大正 10）に来日した際，まず泉岳寺に案内したなかにも読みとれます。外国から来た客にこれこそ日本の武士道であり，日本のキリスト者の精神のありどころだと教えたかったのです。ここには，骨の髄まで愛国心にとらわれている日本人キリスト者内村鑑三の原像があります。

一方で忠臣蔵は復讐の物語にほかなりません。天皇に対する忠誠心は，天皇に何かがあれば，躊躇することなくその仇を撃つ，復讐するということでもあります。このことは，日清戦争に勝利したにもかかわらず，三国干渉で遼東半島を返さねばならなかったという屈辱に耐え，その復讐心を「臥薪嘗胆」に託して教育に励んだ教師の想いにみることができます。その一人，徳島県の尋常高等小学校教員高室由蔵は，日露戦争の勝利を，「庭に植うる大和桜は露西亜撃つ三十七（ミソナナトセ）のしるしにぞある」と詠んでおります。まさに「臥薪嘗胆」を掲げた教育は，幕末の御一新をうながす「攘夷」という言説とともに，日本国民の心に「復讐心」を根深

く刻みこんだのです。いわば日本の国民精神を呪縛している「母乳とともに飲みこんだ愛国心」なるものは，このように説き聞かされた「復讐心」教育を基底にすることで，危機の時代に噴出し，国民を狂的ともいえる排外主義に奔らせる素因となったともいえましょう。

6 「大国民」という幻影

6-1 殖民帝国への道

日本は，嘉永癸丑以来の「白皙人種」からの圧力に怯え，さらに三国干渉という屈辱に耐え忍んできた心をして，日露戦争の勝利で晴らしたのです。大国ロシアへの勝利は,「白皙人種」を打破したもので，民族としての「復讐」心を満足せしめたものとみなされた。それだけに国民の心は勝利の声に酔い痴れ，国家は世界帝国に連なる「大国民」たる「我」を高らかに宣言します。日本の勝利は，抑圧されていたアジア諸民族の心に火をつけ，民族心を喚起しました。

しかし日本は，このようなアジアの声に耳を寄せることなく,「欧州的帝国」に連なる途を選択します。ここに日本は，1910年（明治43）8月22日に韓国を併合,「前韓国皇帝を冊して王と為す」と，日本が中心となる「冊封体制」によるアジア新秩序の再編成を宣言したのです。いわば天皇を戴く国家は,「欧州的帝国」をめざすアジアの皇帝として，日本帝国による世界秩序の構築をめざし，やがて「皇国」日本の下にある「大東亜共栄圏」という言説にこめられた世界秩序を喧伝し,「白皙帝国主義」に対峙する道を歩むこととなっていきます。

このような日露戦争の勝利がもたらした「栄光の時代」の空気を一身に吸い, 青春を生きた青年がこの基督教独立学園を創立した鈴木弼美の世代, 第一高等学校で新渡戸稲造に出会い，内村鑑三から信仰を学ぶことで，己の生きる場を確かなものとした南原繁，矢内原忠雄等々の世代なのです。これらの青年には，明治天皇の一代に体現された栄光の明治像ともいうべきものが心の奥に鋳込まれており，青春の記憶の根に埋め込まれていた。

矢内原は1894年，鈴木弼美が1899年生まれ。彼らが少年から青年へと成長する多感な時代は，日露戦争の勝利で日本が「大帝国」なる「雄姿」を輝かせ，「大国民」たる我の生き方を問いかけられた青春であったのです。

6-2 「大国民」たる矜持 ──「栄光」の記憶が語りかけた世界

第2期国定教科書の尋常小学読本は，日露戦争の勝利をふまえて編纂され，1910年（明治43）から使用されたもので，ロシアに勝利した国民に何が求められるかを説き聞かせております。そこでは，小学2年生で「サクラ」（巻3）に託して他国と異なる日本の「ウツクシイ」国柄を示唆し，「十一月三日」（巻4）の天長節，3年生になると「神武天皇」（巻5）となり，「日本」（巻6）の風土にふれ，4年生の冒頭で第1，第2が正成の子ども，小楠公といわれた「楠木正行」（巻7），となり，「正成戦死の後十三年目にして，正行が二十三歳の時なりき。正行の如きはまことに忠孝二つの道を全うしたる武士にして，国民の手本といふべし」と結び，天皇のために「忠義」を尽す生き方が「忠孝一致」の道であると教え諭した。そこで求めた「忠孝一致」の姿は，5年生の「水兵の母」（巻9）が日清戦争における一水兵の物語を紹介し，「我が陸軍」「靖国神社」（巻9）を説き聞かせ，「兵営内の生活」（巻10）で軍隊への入営教育となります。

ここで教示された勇敢な兵士へも道は，日本のみならず，外国の物語に重ねて紹介されております。「勇ましき少女」（巻10）は嵐で難破した船を助けるために生命を落したイギリスの灯台番の娘グレース・ダーリングのこと，ナポレオンのイタリア侵攻で雪崩にまきこまれて谷に落下しながらも進軍の太鼓を打ち鳴らしたピエールを谷底におりて救援した将軍の物語として描いた「少年鼓手」（巻11）等にみることができます。

「少年鼓手」は「将軍の愛情と勇気によつて，軍中の花が助かつたので，全軍一同に歓喜の声をあげた，アルプスの山もふるえるばかりに」と結ばれています。将兵一体となった戦場の光景は読本を学ぶ児童生徒の心に強く刻印されたことでしょう。この「少年鼓手」の次が先に紹介した「出征兵士」です。

「出征兵士」に描かれた世界は,「少年鼓手」にみる「将軍の愛情と勇気」に満たされた軍隊像にかさね,「義勇の務御国に尽し，孝子の誉我が家にあげよ」と高らかに謳われたのです。この「読本」が描き出した構成はみごとというほかありません。かつ「辻音楽」(巻12）は，ウイーンの公園でヴァイオリンを弾いて喜捨を乞う老人のためにヴァイオリンを奏でた紳士が著名なヴァイオリンの名手であると紹介し，最後にオーストリア国歌が聴衆の心を圧倒したという義侠心，愛の美談を紹介することで，貧しき者，隣人への愛を問いかけるとともに国歌に歓喜する国民の姿を印象づけた作品です。

第2期国定教科書は，かく「皇国」のために身を捧げることが天皇への「忠義」であると説く世界をして，国家に寄せる想いが日本一国のものではなく，西欧世界にみられる「勇気」の物語に連なるものと位置づけることで,「皇国」という閉ざされたナショナリズムをして，広く開かれたナショナリズム，国民精神の物語に展開せしめたのです。この開かれたナショナリズムへの眼は，4年生で「世界の話」(巻8）として諸民族のことなどを紹介し，世界の中の日本に説き及び,「あいぬの風俗」(巻10）で「内地人」と異なる存在に言及し，やがて最終学年で日本列島をめぐる自然環境をふまえ,「台湾より樺太」「樺太より台湾」「韓国の風俗」(巻11）と日露戦争後の帝国日本の相貌を描き出します。ここに集う民の雄姿は,「万世一系」の「皇室の大みいつ」が輝く「君子国」,「勤勉・努力」する民であり，東西文明の長所を取り入れて「先進文明」を担い,「東洋平和」をめざす「天職」を負わされた国民だと,「同胞ここに五千万」と高らかに言挙げされたのです。

北は樺太・千島より，南台湾・澎湖島,
大洋の波に洗はるゝ　大小四千の島々に
朝日の御旗ひるがへす　同胞こゝ五千万

神代はるけき昔より　君臣分は定まりて

万世一系動きなき　我が皇室の大みいつ。
あまねき光仰ぎ見る　同胞こゝに五千万。

武勇のほまれ細戈（くわしほこ）　千足（ちたる）の国の名を負ひて
礼儀は早く唐人も　称へし其の名君子国
祖先の遺風つぎつぎて　同胞こゝに五千万。

瑞穂（みづほ）の国と農業は　開けぬ地なし，野も山も
商工業の発達に　皇国（みくに）の富を起さんと，
勤勉・努力たゆみなき　同胞こゝに五千万。

智は東西の長を採り，　文明古今の粋を抜く。
建国以来三千年　歴史の跡にかんがみって，
日進月歩ゆるみなき　同胞こゝに五千万。

東洋平和の天職は　かゝる，我等の肩の上。
東方文明先進の　任務は重き日本国
上下心を一にして，同胞ここに五千万

修身の徳是なりと，教育勅語のり給ひ，
戦後経営かくこそと，戊申の詔書かしこしや。
大みことのりたふとびて　同胞ここに五千万

小学生は，このような「同胞五千万」の日本国民であることを教えこまれ，戦勝国民に相応しい国民の道を歩むように育てられたのです。その「国民」に問われたのは，「忠孝一致」の道ですが，世界に冠たる「大国民」に相応しい「品格」です。卒業を前にした生徒は，巻 12 で「大帝国」に相応しい国民の在り方を「大国民の品格」「自治の精神」「帝国議会」「軍人に賜はりたる勅語」「卒業」と学び，良き「臣民」たれと諭されたのです。ここ

で説かれた「大国民」に求められた「品格」は「官位・門閥・技術・学問等に於て衆を抜く者は，個人としても自ら高尚なる品格を要するが如く，世界強国の国民たる名誉を負ふものは，国民としても之に相応する品格を備へざるべからず。」と語りかけ，国民とは何かを問いかけ，「世界強国の国民」に求められる国民像を提示します。

> 国民は個人の集合より成るものなれば，国民の品格といふも亦各個人の品格の外に出でず。国民各自の行為をつゝしみ，品格を重んずるは即ち国民の品格を高むる所以なりといへども，殊に他国人の注意を引くものは社会の公徳及び国民の度量なりとす。
> 公徳とは公衆の衛生を重んじ，社会の規律を尊び，公共の物品を大切にする等，総べて衆人の利害を考へて其の行為をつゝしむ徳義をいふ。市街・道路を不潔にし，官庁・学校・神社・仏閣等の建築物をけがし，公園の樹木を折取るが如きは，公徳の低きを示し，大国民の品格を傷つくるものなり。

かく問いかけをなし，日本人がいかに「公徳心」を欠落しているかを，「衆人群集」の場所や旅行中の姿等々を具体的にあげて問い糺し，その群る姿が「文明国民」の為すべきことではないと論難し，イギリスやドイツで交通機関，公共機関等でいかに規則規律が遵守されているかを具体的に紹介し，公衆道徳の有無が「文明」国民であるか否かをきめるのだと説き聞かせます。日本国民が学ぶべきはこれら西洋人が身につけている公衆道徳――「市民精神」だと。まさに日本国民には，「世界強国の国民」として，「大国民の度量」が求められたのです。

> 外国人に接するに人種・宗教・風俗の如何を問はず，いはゆる四海兄弟の精神を以て等しく之を親愛するは大国民の度量なり。国力我に劣れる国民を見て，やゝもすれば軽蔑の念を以て之を迎へ，甚だしきは之と交るを喜ばざるが如きは，却つて我が国民の度量の狭く，品格の

低きを示す所以にして，国交を傷つけ，随つて国力の発展をさまたぐること多し。

いわば戦勝国民となった日本人は，「世界強国の国民」として，「我等五千万の同胞は常に大帝国の国民たるを思ひ，一言・一行の間にも，大国民の品格を高むるの用意あるべきなり」，と「大国民」たる生き方をめざさねばならなかったのです。ここで説き聞かされた「国民」像は，西欧社会にみられる「公衆道徳」を範としていますように，「品格」という言説を公共心の有無という「市民精神」の在り方で読み説こうとしたものだといえましょう。このような「大国民の品格」なる言説こそは，第一高等学校校長に就任した新渡戸稲造が「修養」を説き，社会的責務を問いかけた営みにみられますように，開かれたナショナリズムをささえる精神の培養器となったものにほかなりません。この開かれたナショナリズムこそは，新渡戸に眼を開かれ，内村鑑三によって聖書の信仰にとらわれた南原繁，矢内原忠雄をはじめ，内村鑑三に指示されて山形県小国にキリスト教を伝え，この独立学園を創立することとなる政池仁，鈴木弼美等にみられる愛国心を生み育てた世界です。

6-3 「一家団欒」という幻想 ──「世界強国の国民」がみた光景

日露戦争の勝利がもたらした世界は，「大国民」たる自負心をして，日常生活の場でどのように語られていたのでしょうか。その一端は，小学唱歌の「冬の夜」（1912 年）が唄う光景にみることができます。

ともしび近く　衣（きぬ）縫う母は
春の遊びの　楽しさ語る
居並ぶ子供は　指を折りつつ
日数かぞえて　喜び勇む
囲炉裏火はとろとろ　外は吹雪
囲炉裏のはたに　縄なう父は

過ぎしいくさの　手柄を語る
居並ぶ子供は　ねむさ忘れて
耳を傾け　こぶしを握る
囲炉裏火はとろとろ　外は吹雪

この光景は，囲炉裏をかこみ一家団欒する世界に，日露戦争の勝利で「世界の強国」となった日本の家庭像，「一村は一家の如く和合して，二十年来未だ一人の犯罪者をも出したる例なし」と紹介される「平和なる村」（巻11）に暮らす一家の姿が醸す世界を提示したものです。「衣縫う母」が語る春の野遊びの楽しさに，「居並ぶ子供」は指で春の訪れを待ちます。子供たちは，「縄なう父」が日露戦争の栄光を語る「過ぎしいくさの　手柄」話に心うばわれ，「ねむさ忘れて　耳を傾け　こぶしを握」り，外は吹雪を忘れるほどに興奮した情景が描かれています。ここには，心の原風景として，日本の子供たちが幼き日より身心に刻印されてきた「国民意識」の祖形とも言うべき世界が読み取れます。

なお，この「冬の夜」は，1945年の敗戦後にもひきつがれますが，「過ぎしいくさの　手柄」話が敗戦で失われ，「過ぎし昔の　思い出」に過ぎないものとなり，話のリアリティを忘失したものとされています。ここにみられるリアリティの喪失こそは，敗戦によって，「国家」「国民」を内在的に問い質す眼が稀薄になった戦後日本の姿を代弁しているのかもしれません。

6-4　記憶を共有していく作法 ── 死者の呻きに心よせて歴史を読む

子供たちは，「冬の夜」で聞かされた「いくさ」の手柄話を遠い世界の物語としてではなく，日常的に生活している世界の物語として受けとめ，その話を折にふれて確かめることが出来たのです。ここに語り聞かされた物語は，戦争をめぐる記念碑等々として，日常的に目にすることができました。このような記憶の場は，歴史として説き聞かされてきた物語をして，現在を生きる物語として生命をあたえる器にほかなりません。国家は，国

家の物語を多様に造形していくことで，国家の精神の原器となし，国民の造型をしていくことで，国民国家への道を歩んだのです。

1920年（大正9）から使用された第3期国定教科書「尋常小学国語読本」の「記念の木」（巻6）は，戦死した子が植えた木に寄せ，戦争の記憶を追体験していくことを問いかけ，記憶の器が歴史を蘇生していく営みであることを説いたものです。ここに歴史は，過去の物語としてではなく，現在をいきる生命のある，実在するものとして子供の心に谺する世界をもたらします。まさに記憶を共有することは，過去の世界に併走していくことで，現在を生きる営みなのです。「記念の木」はこのような世界に誘う物語にほかなりません。

村の学校のげんくわんの
向つて右の落葉松（からまつ）は，
わたしの子どもが植ゑたので，
其の子はとうに戦死した。
　あの学校がたつた時，
　うちの畠にあつたのを
　死んだあの子が掘取つて，
　かついで行つて植ゑたのだ。
あの子は十二，落葉松は
あの子のせいより低かつた。
それが今では学校の
二階のまどにとゞいてる。
　あの子がいくさに行く時に，
　学校の前でふりかへり，
　「わたしの植ゑた落葉松が
　あんなに高くなりました。」
昨日学校で校長に，
あの木の事を話したら，

はじめて聞いた記念の木,
大事にするとおつしやつた。

このような国民の記憶の場は，天皇をめぐる行幸記念碑が「聖蹟」とされ，使用された器類をある種の「聖遺物」視し，崇拝の対象とされたものもあります。かつ戦役記念碑・忠魂碑等々は，多様なかたちで造営された世界で語られる「いくさ」語り，戦争譚によって，戦争体験を広く共有し，国家の「栄光」像を増幅し，「愛国心」の培養器となっていきます。

いわば御一新以来の日本は，神武天皇，楠木正成等に関わる記憶をはじめ，明治天皇をめぐる物語を多様に説き聞かせ，その記憶を共有しいくことで，国民精神を涵養してきました。なかでも明治天皇の治績をめぐる記憶の共有は，行幸の譜を跡づけ，「聖蹟」に指定することで，「聖天子」像を根づかせたのです。「聖天子」像は，行幸の途次における「御手植の松」を「御幸松（みゆきのまつ)」として語り継ぎ，「天皇霊」の寄り代とみなす観念に重ねられ，天皇をめぐる記憶が増幅され，国民の精神的基底に根をおろしていきます。

天皇は，一方では軍人に対しては軍人勅諭で「朕は汝らの頭首」と語りかけていますように，「生身の姿」をさらして命令しないかぎり，軍隊の統帥者たりえなかった。「頭首」との言説には生身の天皇の想いがこめられているのです。

この「頭首」とは，現在風に言えば，「マフィアのドン」との言説にみられる「ドン」のこと，『日本の頭首（ドン)』という山口組の全国制覇をめぐる抗争を描いた映画を観たことがありますか？　1970年代の学園闘争期に学生の心を奮い立たせた映画ですが。「頭首」というのはそのような類の言語様式。

日本の軍隊は，「頭首」なる言説に託されたように，年次的な序列意識による上下関係を絶対化した主従制的秩序を組織原理にして成立していましたが，この点で日本のやくざ組織に近いわけです。この組織原理は，いまだに大学の体育会にもみられるわけで，日本のスポーツ界が共有している

馬鹿げた根性論を横行させている素因かもしれない。天皇が統治する日本社会は,「頭首」なる言説が物語るように，主従制的支配原理にささえられた国といえるのではないだろうか。

まさに「頭首」たる天皇は，ヤクザの親分が「鉄砲玉」となって身をささげた子分を想うように（山平重樹『ヤクザに学ぶ組織論』2006 年），己のために戦死した将兵に寄り添うことで，その存在の場を確かなものにしていきます。将兵は，天皇への「忠義」を，戦場における死で輝かせようとしたのです。かくて戦争をめぐる記憶は，凱旋将兵の「いくさ語り」，武勇譚として,「天長節」や日露戦争の奉天大会戦に勝利して奉天に入城した 3 月 10 日の「陸軍記念日」，日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を撃沈した 5 月 27 日の「海軍記念日」などの式典で語り聞かされるわけです。これらの記憶は,「戦場の死」を「忠魂」とする営造物,「忠魂碑」「戦役記念碑」等々の記念碑に封じ込められた世界にほかならず, 天皇に収斂していく「死の物語」として美化されて語り継がれ,「天皇の国」に想いを託す「愛国心」の原器となりました。

ここ小国町なり，叶水という所の墓地などに行ったことある？　ここは集落墓地だろうと思うけれども，時間があったら，その墓地に行ってみて下さい。村の墓地に行くと，そこには村から出征した戦没者の墓があるはずなのね。日本の墓は,「何々家」とあるように「家墓」が基本だけれども，戦死した人の墓は「陸軍何等兵何々」と位記階級と姓名が刻まれている個人墓になっているのが目につくはずです。墓石の側面には，死者の軍歴として何時の戦争で何処で死んだかという記事が刻まれています。戦死者は，靖国神社に祀られて「靖国の神」にされたがため，祖霊が眠る世界，家墓に入れるわけにいかないので,「個人墓」として建立され，その多くが「家墓」より大きなものとなっている。

このような戦死者の墓を見ることによって，この村，この集落にとっての戦争の痕跡が読みとれる。日本の戦争を暮らしの場である集落から読み解くことができる。日清戦争，日露戦争と 10 年ごとの戦争がもたらした死，国家が村や町に刻みこんだ戦争の翳を確かめることで，生活の場であ

る地域社会から国家の営みを問い質すことが出来る。日露戦争と「大東亜戦争」といわれたアジア太平洋の戦争における死者はどこの集落でも確かめることができます。

この学園がある小国町から日本の戦争を問うたとき，私が主語で国家に向き合う場を手にすることが出来るのではないだろうか。よく語られる「平和」の重さが確かなものとして実感できるのではないですか。何も世間で喧伝されるように「ヒロシマ」学習と称する「平和学習」をする前に，日常的な暮らしの場にある戦争の翳に向き合ってほしのですが，どう思いますか。

この小国から列島の歴史，日本の歴史を読み解くことで歴史が具体的にみえてくる。いいですか？　教科書などで日清戦争がこう，日露戦争がどうだった，「太平洋戦争」がこうだった，と「帝国主義戦争」とか「侵略戦争」だとか云々と説かれて，具体的な世界が見えますか。そこで語られる「戦争」，ある概念化された「戦争像」を聞かされて，その戦争の世界は何であったのかということが，どこか遠い世界，上の空のできごとではないですか。でも戦争は，生身の人間が死んで行く世界。戦場の死は殺されることで，戦場で生きることは他者を殺すことです。そのような死の存在，その生きてきた姿が見えれば，戦争が私のものとして理解できる，日常的な暮らしの場から読み解けるのではないだろうか。小国町にも集落が見渡せる場所に忠魂碑があるようですが，出征して戦死した兵士の名前が裏に刻まれている忠魂碑もある。それを見ることによって，村にとっての戦争を考えてみませんか。

これらの忠魂碑は，「軍国主義の遺物」だとして，論難否定する言説が何かと聞かれます。とくにキリスト者にはそのような気分が強いようです。そこで立ち止まって考えてみてください。「忠魂碑」と「忠魂」に引き寄せた想い，そこに託さねばならない想いとは何なのだろうかを。

内務省は，神社の境内などに「忠魂碑」などの営造物を建立するのを禁止し，もし必要なら各集落がそれぞれに建立するのではなく，行政的な枠組みで町村に一基としなさいと規制指導します。かつ忠魂碑は，単なる記

念碑であり，ある種の「慰霊」をするような類のものではない，このような拝礼の対象になる「宗教性」を具有したものであれば建立してはならない，とまで厳しく対処しています。

それでも「忠魂碑」といわれる戦争記念碑は，集落の産土の杜とか学校の校庭等々というような地域共同体の精神的な要の場所に多くが建立されています。この作法は，国家に強要された死，虚しき死を「忠魂」と位置づけて慰藉し，「国家の死」とみなして顕彰することで，共同体が共有する世界に死者の記憶をとりもどしていく営みにほかなりません。

かくて地域共同体に封じ込められた個別的な死は，国家に対峙する記憶の器とならないように，「天皇の僕」としての死，国家のための死とみなすことで，「靖国の神」として国家に回収していく装置が靖国神社にほかなりません。そのような死の意味は，皆さんがゲームとして遊んでみたという『尚武須護陸』（1893 年）が小学校の教場を振り出しにした人生行路を描いており，「大将」というあがりが至難で，もうひとつのあがりである「靖国社」，靖国神社にしかたどりつけないということに読みとれます。教科書で説かれた国家のために死ぬことが「忠義」であるというイデオロギーは，このような遊びによって，幼き日より日本国民の身心に刻印されていったのです。

ここにみられる作法は，国家が負わせた個別的な死をして，「国民の死」とすべく国家廟に祀ることで国民国家の精神的砦を構築するための国民国家の神話を造型していく営みに通じるものです。フランスには，ナポレオン廟であるアンヴァリッド（L'hôtel des Invalides）があり，第 1 次世界大戦の記念碑が各町村に造営されており，第 2 次大戦とその後のインドシナ，アルジェリアなどでの戦死者が市役所などの壁に刻まれ，その死を記録しています。中国には，各行政区の革命記念館で革命烈士が顕彰され，その生誕地などには記念碑等が建立されています。いわば国家は，国家の精神を体現した死をして，国家の器となし，ある種の国家廟に祀ることで国民精神を教導し，国民精神の昂揚をはかったのです。

まさに「皇国」という言説で潤色された日本型国民国家は，忠魂碑をは

じめとする戦役記念碑の類を精神の基底に取り込む器とすることで，地域共同体に固着しかねない世界をして国民精神に傾注していく回路の極点に靖国神社を位置づけ，さらに宮中の御府に連なる世界を構成することで，「天皇の国」という宇宙を提示していたのです。靖国そして御府につながる回路こそは，村や町の思いを国家に吸い上げていくことで，生まれ育った郷土への想いである家郷に寄せる心であるパトリオテイズム ── 郷党心をして，国家への愛，ナショナリズム ── 愛国心へと架橋していくことを可能としたものにほかなりませ。

この世界は，日露戦争時に小学校で教材として設けられた校区の出征兵士の「記念室」として営まれ，新潟県佐渡の明治記念堂にみられますように，戦後に町村の営みを「国家の栄光」に重ねて語り継ぐ「戦役記念館」を基底に，靖国神社の遊就館に連なることで，国家の在り方を国民に問いかけ続けたのです。

ちなみに明治記念堂は，佐渡から出征した兵士の遺品が集められているだけでなく，佐渡の物産を紹介しています。建物の天井には，佐渡を中心とした世界地図が描かれており，佐渡から世界を問い質そうとの想いが表明されています。庭には佐渡に漂着した日本海海戦で撃滅されたロシア艦隊水兵の墓がありますが,広く世界に開かれた郷土愛を提示したものです。ロシア水兵を葬った墓は，隠岐にもありますように，日本民衆が身につけていた開かれた心をうかがわせるものといえましょう。また展示されている遺品には，戦死者のポケットにあったロシア人兵士がもっていた家族の写真に「ロスケも家族を思う」，と書いてあるのがありました。ここには，ロシア兵をみるなかに，己の家族によせる想いが読みとれましょう。このような遺品をみつめるなかに，私にとっての戦争とは何かを考えたいものです。

いわば戦争をめぐる記憶は，死者と同伴していく個別的な物語として問い語られていましたが，時とともに戦争の勝利がもたらした「栄光」で潤色され,国家の物語へと昇華されていきます。かくて靖国神社の遊就館は，戦勝で「大国」となった皇国日本の雄姿をして，天皇の御稜威に重ねて説

き聞かせることで，天皇の「御民」たる我を確認させる装置となったものにほかなりません。いわば戦死者に連なる共同体の記憶は，靖国神社と遊就館の世界に取りこむことで，戦争による個別的な死をして「国家の死」と意義づけ，国家に回収したのです。

かつ明治天皇は，民の「頭首」として，日清戦争で一身を捧げてくれた将兵に想いを致す器として，宮中に日清戦争の戦利品とともに戦没将兵の名前と遺品を収めた振天府を造営しました。この営みは，北清事変の懐遠府，日露戦争の建安府となり，大正天皇が「欧州大戦」，第一次大戦の惇明府，昭和天皇が満州事変，上海事変以後のものを顕彰する顕忠府の設立となったもので，大元帥として開戦した戦争の死者を慰弔し戦利品をはじめ多様な遺品と記念品を収めました。

これらの御府は，宮城吹上御苑内の南に造営され，天皇はじめ皇族が心を寄せる神聖な場とみなされました。その場は，卒業時に東京高等師範学校卒業生，ついで女子高等師範学校卒業生へ特別に拝観が認められました。この「思し召し」は，師範学校卒業生が教場で「良兵良民」を訓育する使命を負わされていたことへの期待にほかなりません。時代とともに選ばれた新聞記者，教誨師等々へと，特別な拝観が恩賜として許されていきます。拝観の栄誉は，広く国民に語り聞かされ，御府にこめられた世界を「天皇の恩愛」という言説で潤色し，国民の心に「戦争の死」を「天皇のための死」とみなす心を醸成していく磁場ともなりました。

なお御府は，敗戦後に遺品をはじめ戦利品等を密かに処分し，現在は倉庫となっているとのことですが，その荒廃が気になりました。5棟の建物は，それぞれに個性的な建築群で，前庭に戦利品と思われる見事な石が放置されたままで，戦後の荒みを想起させる世界でした。

6-5 「愛国心」をめぐる相克

天皇の恩愛は，暮らしの場にある忠魂碑等の記念碑，戦死者をはじめとした戦争にまつわる遺品等々を収めた記念室を基底に，靖国神社と御府が紡ぎ出す物語によって，日本人の心に刻印され，国民精神を規定する忠誠

心を時代とともに増幅していく器となったものにほかなりません。このような日本人の姿は，ラフカディオ・ハーン小泉八雲が「家庭の祭屋」（平川祐弘編『神々の国の首都』1990年）で，「一身を捧げることの美しさ」，「熱狂的な忠誠心が，暮らしの一部」だとなし，このような心の在り方が「神道」によって聖化された世界として提示されていることを次のように問い語っています。その忠誠心は，「私たち西洋人の場合，忠誠心はもっと成熟した知識と思慮から生まれる信念」なのに対し，神道によって血肉化された日本人の美意識のような原始的心性にほかなりません。その心性は，「自己の装飾と倫理の補強に役立つものなら，外来思想のいかなる形式をも採り入れ，これを同化」する器となるものでした。

> 神道の目に見えぬ生命力は，今日も，改宗をもくろむ宣教師たちの必死の努力を阻んでいるが，それはたんなる伝承や拝礼や祭式の力ではない。これらをすべて失くしても，神道は実質的に無傷のまま生き延びるにちがいない。教育の普及や近代科学の影響は，たしかに人々の知見を広め，神道に古来からの考え方の一部を改め棄てさせるだろう。しかし神道の根本の倫理は，いささかも揺るがない。なぜなら神道は，今や一段と高い理念を意味しているからだ ── たとえば勇気をもち，礼儀をわきまえ，栄辱を知ること ── それに何よりも大切な忠誠心。神道の精神とは，子として親を思い，仕事は怠らず，大義のためには狐疑することなく一命を捨てる覚悟をもつことなのである。（略）神道は宗教である ── ただしそれは一般にいう宗教とは違って，先祖代々伝わる道徳的衝動，倫理的本能にまで深められた宗教である。すなわち神道は「日本の魂」── この民族のすべての情動の源なのだ。
>
> 子供は生まれながらにして神道の心をもっている。（略）彼らは生まれつき，われわれ西洋人とはまったく異なる道徳的感情を具えている。日本の学生 ── 十四歳から十六歳の少年たちにむかい教室で，君らの一番大切な願いは何だと尋ねてみよう。彼らが本当に質問者に心を許しているなら，十人中九人までが「天皇陛下のために生命を捧げ

ること」だと答えるだろう。（略）しかし中央を離れたここ出雲では，忠誠心は，喜びと同じように，少年なら誰しもが抱くごく自然な感情だ。理屈ではない。私たち西洋人の場合，忠誠心はもっと成熟した知識と思慮から生まれる信念だが，日本の若者にあっては違う。彼らはけっして「なぜ？」と問わない。一身を捧げることの美しさ ── それ以外の動機はいらないのだ。そういう熱狂的な忠誠心が，暮らしの一部となっている ── ちょうど蟻がその小さな巣穴を守るために本能的にわが身を犠牲にするように，蜜蜂が無心で女王蜂に仕えるように ── そういう血が彼らの体の中を流れている。それが神道なのだ。

忠誠（まこと）のため，上位者（おかみ）のため，そしてまた己れの名のため，平然と死を求めるというのは，よく知られた近世日本の国風だが，これは近世にかぎらず，国史発祥のごく初めの頃から，この国民の一大特長だったように思える。

ここに表白された日本人の心の在りようは，ある聖化されたものですが，1922 年に世界の共産革命を目指したソヴィエト共産党の指導下にあったコミンテルンが主催した極東民族大会で，ジノヴィエフが日本を代表してきた日本のプロレタリアが「母乳とともに飲みこんだ愛国心」に囚われた存在だと論難したことにつうじるものです。ジノヴィエフは，朝鮮や中国などのアジアのプロレタリアに目が及ばない，日本のプロレタリアが骨の髄まで犯されている排外愛国主義を問うたのです。この「母乳とともに飲みこんだ愛国心」は，「国際連帯」をお題目とする日本の共産主義者だけではなく，日本のキリスト者が具有した世界でした。

内村鑑三の言説にはこのような「愛国心」に強くとらわれた世界を読み取ることができます。内村は，日本人キリスト者として明治天皇の死がもたらした喪失感をヨエル記の言に託し，「日も月も暗くなり，星その光明を失ふ」と述べています。しかし内村鑑三は，その「愛国心」からくる慟哭が深くありますが，キリスト者日本人たる真理への眼で，時代の突破者たり得る己の場を確かめ，明日へと飛翔することが可能となりました（「闇中

の消息」『聖書之研究』145号，1912年（大正元）8月)。

申すまでもなく明治天皇陛下の崩御は譬へやふなき悲痛であります，私共は之に由て天地が覆へりしやうに感じます，聖書に謂ふ所の「日も月も暗くなり，星その光明を失ふ」(「ヨエル」3-15）とは斯かる状を云ふのであらふと思ひます，私共は今更らながらに此世の頼みなきを感じます。此悲痛に蔽はれて休暇も休暇になりません，唯夢を辿るが如き心地が致しまして，海も山も私共に平康を与へません，唯此上は死も敗壊も何の関係なき永久の真理を追求するまでのことであります。

まさに内村の心に刻された「母乳とともに飲みこんだ愛国心」は，時に応じて噴出し，日本人キリスト者内村鑑三たる我を確認する器でもあったのです。1925年，大正の終焉が近づきつつある10月，皇后節子（貞明皇后）が詠んだ「異国のいかなる教入る来るもとかすはやがて大御国ぶり」に感激し，その想いを10月14日の日記に認めています。

10月14日(水)晴　秋の田の刈穂の間を巡行した。天晴れて那須嶽の遙かに煙を吐くあたりは画がいたやうな眺望であつた。十二時宇都宮に来り，用事を済ませ，夕暮頃利根川鉄橋を渡り，八時頃柏木に帰つた。車中皇后陛下の御近詠なりと承はる左の一首を幾回となく拝誦し奉り，感激の涙を禁じ得なかつた。
異国のいかなる教入り来るもとかすはやがて大御国ぶり
実に御大作と称し奉らざるを得ない。斯かる偉大なる皇后陛下を日本国に賜はりしことを神に感謝せざるを得ない。実に陛下の仰せ通りである。基督教も日本に入り来りて西洋人の宗教としては存らない。必ずや日本人のとかす（消化する）所となり，「大御国ぶり」を発揮するであらう。然り既に幾分なりと発揮したりと信ずる。まことに有難き次第である。

ここには，皇后の歌に託し，「陛下の仰せの通り基督教も日本に入り来りて西洋人の宗教としては在らない。必ずや日本人のとかす（消化する）所となり，大御国ぶりを発揮するだろう」と，内村鑑三の祈りとも言うべきものが表白されています。内村が説き聞かせたキリスト教，無教会という世界こそは，「大御国ぶりを発揮」した信仰だと思い見なすことで，「不敬漢」として世間から糾弾され，流竄の日々に追いやられて内村に「愛国者」たるキリスト者日本人たる我を確認せしめた信仰の砦だったといえましょう。かくまで身心に鋳込まれた「愛国心」，天皇の国によせる想いとは何なのでしょうか。

この内村の愛国心は，内村鑑三一人の者ではなく，その下で聖書を学んだ人々，南原繁，矢内原忠雄等々が共有していた世界です。これら新渡戸――内村の人脈は，敗戦後の皇室を担い，宮中改革に大きな足跡を遺しました。

7　国家を問い質す場

7-1　「天皇制」という言説

そこで一番大事な問題，天皇という存在は日本国民にとり何なのでしょうか。皇室が関わる世界は「天皇制」として語られています。そこでは，天皇という存在を日本の統治制度の要とみなし，日本という国の在り方が論じられております。「天皇制」という言説には，日本の民主主義の障害物とみなし，天皇と言う存在に規定された制度そのものを批判否定したいとの想いが読み取れます。その一方には，制度を超えた日本・日本人を体現する大いなる存在とみなし，ある「崇敬」すべき対象として，天皇に対する距離感で日本人であるか否かを判別する言説があります。

いわば「天皇」をめぐる言説は，「天皇制」という統治制度として論じきれない，多義的なものがつきまとっているのです。それだけにここで問い語られる天皇とか，「天皇制」とは何なのかが問われます。「天皇」をめぐる多様な言説を読み解くには，「天皇制」なる用語が何時登場したかを検証

するなかで，天皇に向き合う私の場を確かめる作業がいるのではないでしょうか。

「天皇制」という言葉は，ある種の党派的な政治性を負わされた言説から生まれ，学術用語として日常的に使用されるようになったものです。「天皇制」なる言説は，その使用者が「天皇制」なる言語様式に何を託そうとしているかについての検証がないまま，「天皇制」というと何か分かった気分になって話が進んでいく，独り歩きしているのではないでしょうか。このことは1930年代に「天皇制」なる用語が登場してきた問題として後でふれます。

「天皇」は，古事記，日本書紀などにおいて，「ミカド」「スメラミコト」，「アメノシタ」と訓（よみ）が記されております。「アメノシタ」なる訓は，ある地上の空間概念をしめす「天下」「宇宙」を意味したものです。このことは，スメラミコトはアメノシタであり，天皇と国土が一体のものと認識されていたことを物語っています。天皇即国土という観念こそは，天武天皇による律令国家の造営をささえたもので，万葉の歌人が「大君は神」と寿ぎ，律令官人が大君たる天皇に寄せた想いにほかなりません。

この想いは天皇がシラス存在とみなされていたがためです。シラスというのはシロシメスことで，ある尊厳による統治なのです。ある内的尊厳による統治が「天皇」を天皇たらしめたのです。シラス天皇という存在は，天皇不親政，天皇が政治をするのではなく，皇太子とか関白とかが権力を運用する政治を行い，その統治を可能としたのです。

天皇が政治をするには，譲位をして太上天皇，上皇となり院政をすることになります。天皇という存在が時代をこえて存続し得たのは「天皇不親政」ということにあるといえるかもしれません。天皇は，時の権力者の支配に対し，統治権を認める存在として統治権的支配原理を担う存在でした。まさにシラス天皇であることは，個別的な存在を稀薄にしましたが，統治権的支配原理を存続せしめたのだといえましょう。

ちなみに「天皇」は，平城京から平安京へと時代が移るなかで，「だいり（内裏）」，「きんり（禁裏）」，「ごしょ（御所）」等々との呼称にみられます

ように，その所在する空間の名称で示されるとともに，「しゅじょう（主上）」，「てんし（天子）」と抽象化された存在，個別的存在としての名称で語ることがはばかれる，ある種の「神聖」な存在とみなされていきます。このような「天皇」なる存在は，武家の権力が強大になっていくなかで，稀薄となり，時代の権力に左右されていきます。

かかる時代における「天皇」なる存在は，武家がいかに権力を掌握しようとも，権力の正統性を証する権威としてありつづけております。いわば日本の支配原理は，天皇による統治権的権威の構造と武家政権にみられるような主従制的支配原理から生れる権力行使によって営まれていたのではないでしょうか。まさに「天皇」という存在は，主従制的支配原理の根拠となる統治権的支配原理として，権力の源泉となる空気として，時代の波浪にかかわらず存続し得たといえましょう。いわば日本の天皇は，時代における存在の稀薄さが可能とした非政治性のゆえに，最大の政治力を発揮しえた王権だったのではないでしょうか。

いわば「天皇」という存在は，嘉永 6 年癸丑の衝撃，日本列島が国際政治の渦にのみこまれていく時代のなかで，政治的主体となることで民族を結集していく器とみなされ，権力政治の場に位置づけられていくことになります。しかし天皇が国家統治の要となるには，「ごしょ（御所）」「だいり（内裏）」に過ぎない存在の稀薄さをして，中国王朝の「天子」像に重ねることで，統治の主体者に昇華していかねばなりません。その営みは文明開化を啓蒙した 1874，5 年頃の開化本である『開化問答』の世界に読み取ることができます。

御一新から維新へという復古革命で誕生した国家は，天皇を政治的主体とする国家の造型をめざし，「天子」としての天皇の存在を多様に語りかけていきます。この「天子様」は，伊勢神宮の天照大神の末裔と紹介されるものの，その実態が民衆にはみえません。世間では，新政府の徴税強化を，「このごろ天子様はぜいぜいと言うけれども，喘息をわずらったのか」などとの揶揄がもてはやされる始末。何かわかる？　この言は，「ぜいぜい」と税金，税金，何でも税金かける新政府に対して，「旧平」なる保守派の老人

がお上の処置を天皇が「喘息」の病持ちだと反発した科白です。かくお上を呪詛した旧平を嗜めるのが文明派の青年開次郎です。

開次郎は，旧平に「いや，そうじゃない。なんでそんなに天子様がお金を必要しているかにつき説明します。政府が税金をとるのは,天子様が「請負人の棟梁」のようなものだからだと。家を建てるのを請け負った棟梁は,大工，屋根ふき，左官等々を働かせ，その手間代を払わねばならないから,施主から建築費を預かっている。天子様は，新しい国を造るために，それぞれの役人を働かせる棟梁だから，各人の働きに応じて手間賃を支払うわけで，そのために皆からの税金を預かっているのであって，天子様が勝手に使っているのではないのだと。

この天子様は「請負人の棟梁」だという説明は，見事なもので，現在でも税金の説明に仕える話となりましょう。天子の存在はこのような多彩な寓話によって教えられ，政治的主体である天皇の存在が知られていくこととなります。その存在は，神とか何かではなく，小学校の国語読本などで天子，人民のために働く聖天子だと説き聞かせたのです。

7-2 「ミカド」という存在

来日したお雇い外国人は，日本人にとっての天子である「ミカド」という存在を好奇心にみちた目でみつめ,鋭い考察をしています。その存在は,ヨーロッパ世界にみられる君主と異なるもので，ローマ法王のようなものとも紹介されておりますが，日本と日本人の在り方そのものを規定するものとみなされたのです。W. E. グリフィスは，長い在日生活での見聞をもとに，日本人と天皇の関係を『ミカド　日本の内なる力』に著し，その在り方を「ミカド主義」として紹介しています。

> 日本人大衆にとっては，ミカドは一個の人格であるよりもひとつの感情であった。ミカドは伝統的に,「神々」からの遺産をうけついだ聖なるものの化身であった。
>
> ミカドは「無窮の大日本」の歴史において，あらゆる光輝あるものの

生きた象徴である。彼はニッポンの子らに対して，現在もっとも価値あるもの，未来に幸せとなるものを，すべてさし示す。彼は歴史と宗教を一身にそなえている。彼は国の記憶と人民の希望とを体現している。

このような天皇に寄せる日本人の想いこそは，天皇が「人」であり同時に歴史的・国民的な精神とそのあらわれとしての政治の仕組みや働き方という意味での制度,「ミカド主義」とも言えるものです。そのため日本人には，その当初から今日にいたるまで，個人の人格という観念が弱かった。この人格意識が弱かったことに加えて，個性の把握も同様に弱いのだと。

これらの指摘は，日本人論としても的を射たもので，人格観念が脆弱であるがため, 個の自覚が乏しいのだと。1930 年代に登場してきた「天皇制」なる言説は，グリフィスが説いた「ミカド主義」に対し，いかなる世界を提示したのでしょうか。そこで「天皇」とか「日本」という呼称はどのようにして確定してきたのかをみることにします。

7-3 「天皇」「国号」をめぐる確執

「天皇制」なる言説は，1930 年代に登場し，夜郎自大みたいに広がっていきます。この時代は，政府に国体明徴を宣言させる方策として，君主の称語を「天皇」に，国号を「日本」と明確にせよと要求し，天皇への忠誠競争が展開され，天皇をめぐる話題が日常的にみられた時代でした。

日本の君主の称号は「天皇」と公的に確定されていませんでした。1881 年に君主の称号を「天皇」にするようにと提言されますが，決定されません。公文書では,「天皇」「皇帝」が混用されています。公文式では，1883 年（明治 16）4 月 6 日に外国に発送する公文に天皇・皇太后・皇后の称号を決定し，外国人への公文には皇帝陛下・皇太后陛下・皇后陛下とされ，在外公館・領事館等には聖上・皇太后宮・皇后宮，または天皇陛下・皇帝陛下・皇太后陛下・皇后陛下と規定しました。

宮内省は，天皇陛下の尊称は専ら内事に用い，皇帝陛下の尊称は内外に

相通用するものだ，と87年6月9日に内閣記録局の照会に回答しています。公的には，「天皇」なる呼称ではなく，「皇帝陛下」だと認識されていたのです。皇帝と天皇は違います。皇帝は，一般君主制における「皇帝」であり，他国にもみることができます。天皇は，天照大神につらなる神聖なる存在で，日本固有の特殊君主制の称号なのです。

この「天皇」称号が注目されるのは大正時代になってのことです。そこには，日露戦争の勝利で世界の帝国になることで嘉永癸丑以来の国家目標が喪失し，明治天皇の死による国力の下降という不安にさらされたがために，国家のかたちである「皇国」，万世一系という幻想を実態化し，世界に冠たる日本だとの想いに，国家の存在根拠を求める衝動がありました。かかる衝動は，1913年（大正2）7月9日に成立したばかりの中華民国を第三国との間では「支那」と呼称すると山本権兵衛内閣が閣議決定し，日本こそがアジアの覇者である宗主国だとの主張をしたなかにも読みとれます。

日本という国の存在を聖化しようとの想いは，第1次世界大戦の戦勝国に列するなかで高揚した気分にうながされ，大正末の1926年3月に「国号ノ呼称使用ニ関スル請願書」を提出，日本の国号が外交文書などでJAPANと表記されているのを「ニホン」か「ニッポン」に改めろとの主張となります。この提案は，幣原喜重郎外相の意見で不採択になります。翌27年（昭和2）1月には「我ガ国国号ノ統一顕正ニ関スル件」が第52議会に提出され，2月に閣議が不採択を決定。ただちに3月に「国号ノ呼称使用ニ関スル請願」を手島貫一が内大臣に提出，と「国号」問題が宮中をもまきこむ政治問題となったのです。30年2月には函館選出の仲原敦正が幣原外相にJAPAN使用の廃止を建言します。ついで34年2月19日には「国号尊重に関する請願」の趣旨説明となり，4月19日に逓信省が切手のJAPANをNIPPONにあらため，8月22日に文部省国語調査会が国号を「ニッポン」と称する案を政府に提出しますが，閣議で採用されませんでした。「国号」「天皇」呼称問題は，8月29日には松田源治文相が「パパ・ママ」の呼称を非難するような「国体」讃歌の言説にうながされ，時代の気分となっていったのです。

外務省は，条約正文に「天皇」「日本」を使用せよとの主張に対し，JAPAN を「日本」にすると，アルファベット順の国際会議の席順が，NIHON だと N で J の後になると説きます。しかし 1935 年 8 月 12 日には国号が「大日本帝国（DAINIHONTEIKOKU）」に統一され，J より前の D とすることで落着します。なんとも子どもじみた類の話。これが国家をゆるがせた国号問題の決着だったのです。ここに外務省は，翌 1936 年 2 月 17 日に国際条約等に記載する元首の称呼をいままでの「皇帝（EMPEROR）」より「天皇（TENNOU」）に改めることを決定し直ちに実行するとの通牒を宮内省に送りました。

この称呼の変更は，第 1 師団の反乱事件が帝都を襲った 2・26 事件の衝撃が渦巻く世間に，4 月 18 日に公表されました。まさに昭和とともにはじまった国号・君主の呼称問題は，「大日本帝国天皇」という言説を具体化することをめざし，神聖帝国日本の雄姿を世界に発信する器を造形することで，国体明徴の声を代弁する尖兵たる役割をはたしたのでした。

この間，宮内省は，欧文による称呼は従来通りの表記だとして，“Hirohito Emperor of Japan” を貫いております。この開かれた宮中の感覚に対し，「国体明徴」なる言説に呪縛された政府は，“DAINIHONTEIKOKU TENNOU” と記載したのです。さらに 1940 年・皇紀 2600 年には，7 月 26 日に基本国策要綱が「帝国」を「皇国」としましたように，皇国日本が神聖帝国であることを謳歌する国体精神があらゆる場面で力説されました。「国体」なる言説は，国民精神の原基だとして，日常生活の場を覆っていきます。

このような時代の在り方を見てもわかるように，「日本」なる国号は昔から決まっていたのではなく，元首としての天皇は諸外国の皇帝にならぶ “Emperor” でしかなかった。そのため戦功のあった兵隊にあたえた賞状，感状には，「天皇」でなく，「大日本帝国皇帝」「日本国皇帝」なる記載が広く見られたのです。

1930 年代に宣揚される「国体明徴」なる言説は，天皇を過度に神格化し，神聖君主としていきます。この作法は，神聖不可侵なる存在である天皇を

信仰対象として絶対化し,天皇信仰ともいえる言説を増幅していきました。ここに日本国民は，天皇との距離関係で臣民たる己の場を確定することを求められ，強い権威信仰の徒になっていったのです。

コミンテルンは，かかる時代が提示した天皇の国に対峙すべく，31年政治テーゼ草案をふまえた32年テーゼ「日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」で日本革命の第1の課題が「天皇制の転覆」であると指示します。「天皇制」なる訳語は，27年テーゼにみる「君主制」をして，国体明徴の空気で横溢していた「天皇」なる用語によせて訳語に造形されたものではないでしょうか。共産主義者は，日本がめざした「憲法政治」である立憲君主制が想い描いた君主像としての天皇のあり方をして，治安維持法体制下で強権的に説かれる「国体明徴」なる言説で横溢してきた「神聖天皇像」に引き寄せて理解したのです。

いわば万世一系の皇統による「神聖」天皇が支配する「神聖国家」日本は，天皇をロシアの専制君主ツアーと同質のもとみなされ，ツアーが支配する専制国家に重ねて把握することで，日本国家を「天皇制国家」と規定し，革命の敵とすべき世界を具体化しえたのです。この規定は，天皇という権威にもとめた信仰，天皇制的権威信仰の世界をして，ツアーに寄せる信仰と同質のものとみなしてのことです。

まさに日本の共産主義者は，国体論者の「神聖国家像」と同質の思考回路，ある種の権威を絶対化，党を物神化し，党内序列に人間の価値をみいだすわけで，天皇制的権威信仰と同質の世界を生きていたのです。そこには，日本の知識人が文明知 ── 先端知の権威で己の社会的地位を計るごとく，天皇や党の権威に寄り添うことでしか己が存在する場を見出せない群の姿があるのではないでしょうか。

このような思考の回路こそは,「母乳とともに飲みこんだ愛国心」の持主である共産主義者をして，コミンテルンの方針を受けとめ，党とソヴィエトにわが祖国を見出し，忠誠をささげる信仰心を生み育てたたものといえましょう。そのため日本の共産主義者は，私を主語として思考する営みを否定し，党という権威を絶対化して盲従する点で，まさしく天皇制的権威

信仰に通じる世界で生きてきたのです。いまだにその世界に囚われており，国体論者以上に「天皇主義者」であるといえましょう。それは文明と天皇制が同時的に誕生してきた一つの結末でないでしょうか。ここに日本の知識人が墜ちこんだ隘路があります。そこで日本の近代知は，「日本という国」をどのように読み解いたかを考えることで，問い質すこととします。

7-4　日本という国の容（かたち）

京都帝国大学教授河上肇は，「日本独特の国家主義」（『中央公論』1911 年 2 月）で，日清日露戦争が日本人の自負心に何を生じたかを論じました。日清戦争の勝利は，「清国」の圧倒的影響下に文明を構成してきた日本人にとり，その勝利を西洋文明の輸入において日本が清国に「一歩を先ん」じていからで，「東洋人たる日本人としての吾が自負心を惹起するに至らず」と。しかし日露戦争の勝利は，西洋人である「露国人」に勝ったことで，「吾が国民の自負心 ── 東洋人たる日本人としての自負心を強め」，「西洋文明の崇拝は変じて軽蔑と為り排斥と為り，其の輸入の歓迎は変じて警戒と為り禁遏と為らん」としていると。かくて日本人は，「自家の文明に何等か偉大なる特徴あることを自覚するに至り」，日本の文明史的意義の如何を問い質すこともなく，「片端より手当り任せに，各々其の思付きに従ふて復古的言説と運動とを開始」し，漢学・家族制・孝道・武士道・報徳宗等々の言説が流行していると指摘します。このような時代の空気は，西洋文明輸入の反動にほかならず，「民衆の底部より起りたる永続的の現象」でもあり，「挙国一致」で戦争を戦ったように，戦勝がもたらした「国民的自負」も「挙国一致，上下朝野を貫く」ものとなっていると。

このような日本民族の在り方は，西洋人の歴史に照らしてみれば，「西洋の個人主義」に対し，「国家を第一義」に「個人は第二義」とする「国家主義」の国だと説き，「西洋が「天賦人権，民権国賦」であるのに対し，日本が「国賦人権，天賦国権」「西洋人の人格と日本人の国格」だと表現されています。

日本に在つては個人を以て自存の価値あり自己目的性を有すと看做す能はず，独り自存の価値を有し自己目的性を有する者は只だ国家あるのみと為す。故に日本人には天賦人権の思想なくして，天賦国権の思想あり個人の権利は只だ国家の承認を経て始て存在す。国家は只だ其の自存の目的を達するの手段として，個人に一定の権利を認む。個人の有する権利は，本来自己目的の為めに非らずして，只だ国家の道具として役立つが為めのもの成り。

河上は，日本で「最も高貴なる人物は最も多く国格を代表するの人物」，「最も完全なる国格を保有」する存在が天皇だと位置づけ，「国家の利害を自己の利害とし」「国家の公の利害の外別に個人としての私の利害を有」さないがために，「最高最貴」の方として信仰され，「国家を神とし」「国家の代表者として現在の天皇を神の代表者と仰ぎ奉る」日本の在り方，国家至上の価値観を「西洋の基督教と日本の国家教」とを対比をするなかで論難しております。いわば「日本独特の国家主義」は，西洋近代を内在的に照射することで，天皇教に体現された日本という国の在り方を解析したもので，現代日本の精神風景につながる世界を提示したものにほかなりません。

新渡戸稲造は，河上が剔抉した「国賦人権，天賦国権」の国で生きる青年に，「国格」にとらわれる生き方ではなく，「人格」への眼差しを説き聞かせた一人です。その著『修養』（1911年）は，第一高等学校校長として，『実業之日本』に連載したもので，9月3日に初版が出され，同月中に6版，10月9版，11月13版，12月14版と重ね，1912年24版，1913年28版，14年に縮刷版となり41版，15年46版，16年3月48版，と版を重ねたほどのベストセラーとなった作品です。縮刷版の装丁は天金で聖書のような造本になっています。まさに日露戦争後の社会を生きる実業青年は，『修養』に人生の指針を求め，処世の途に導く「聖書」のごとく愛読したのです。

『修養』は，「戦勝国民」としての野郎自大とも思われる野放図な自負心の横溢に対し，「平生の心掛と品性」の大切なことを説き，戊申詔書的世界

で声高に説かれる「通俗道徳」的「修養論」に対し，青年元気の源になる地に就いた営みを可能とする力を身につける方途を「修養」に見出し，具体的事例を話題にして説き聞かせています。なかでも「第二章　青年の立志」は，社会を水平な横の関係で見るのではなく，「人間は縦の空気をも呼吸せよ」と人間を超えた者との関係，垂直な眼が問われているとなし，次のように述べています。

> 人生は社会のホリゾンタル（水平線）的関係のみにて活るものでないことを考えたい。ホリゾンタル ── 多数凡衆の社会的関係を組織して居るその水平線 ── に立つて居れば，多数の間に其頭角を抜き，其名利を恣にし，又指導することも出来るであろうが，併し一歩を進めて人は人間と人間とのみならず，人間以上のものとの関係がある，ヴァーチカル ── 垂直線的に関係のあることを自覚したい。我々はただに横の空気を呼吸するのみで，活きるものでなく，縦の空気をも吸うものであることを知つて貰ひたいのである。人間と人間との関係以上というと，何だか耶蘇教の神らしいことになる，併し僕は必らずしも神と限るのではない。仏教の世尊でも，阿弥陀でもよい，神道の八百万の神でも差しつかえない。僕は何の宗教ということを，ここで彼れ是れいうことを好まぬ。只人間以上のあるものがある。そのあるものと関係を結ぶことを考えれば，それで可いのである。此縦の関係を結び得た人にして，始めて根本的に自己の方針を定めることが出来る。

社会で生きていくには水平的関係性でなく垂直的関係が問われている。他者との関係を水平型，横とのつながりで見る限り，人間的な上下関係でしか己の場を計れず，「国格」的秩序に組み込まれた存在でしかない。しかし垂直型の思惟，人間以上の大いなる存在への目は，一個自立した己の場から世界を読み直すことで，人格なる観念を可能とします。想うに日本の民主主義は，大いなる存在に向き合い己を問い質すことがないがために，他者との関係性で己を位置づける水平型の思惟構造にとらわれた平準化で

しかないのです。

新渡戸が説いた垂直的な思惟は,「人間」を人間とする，人の観念を身につけ，私の場を確かなものとする目を育てたのです。その目は，新渡戸によって内村鑑三を知った青年をして，人間を超えた大いなる存在としての造物主たる神に出会わせます。この学園創立者鈴木弼美は，この「神に依り頼む」(『神に依り頼む』1987年）信仰に生きることで,「学園」をささえ，確かな人生を可能にしたいと問い語っています。この信仰こそは，戦時下の国家に対峙して己の場を保持せしめたもので，明治天皇の軍人勅諭を武器に権力を問い質すことを可能にしたのです。

鈴木弼美は，明治天皇が軍人勅諭で「朕か国家を保護して上天の恵に応し祖宗の恩に報いまゐらする事を得るも得ざるも」と説いていることに,「祖宗即ち神代の神以上の上天の存在を信じ」ていたのだと，明治天皇に大いなる「上天の存在」への目があったと述べます。しかし「天皇を神」とする国体明徴運動は,「上天の存在」への目を失わせたがために，満洲事変にはじまる「国難」をもたらし，日本を亡びの道に歩ませていると。いわば鈴木は，軍人勅諭の言説を武器に,「上天の存在」への目を忘失し,「神でない天皇を神として拝ませた」がために「国難」を招来したのだと，特高警察の取り調べに応じ，検事を辟易させ，敗戦に先だち1945年2月に釈放されました。

ここに想起すべきは1945年の敗戦に向き合う矢内原忠雄の目です。かかる1930年代の時代像に結びついた「天皇制」なる言説には，矢内原忠雄などの世代の人たちにみられますが，ある種の強い違和感を表明する者もいました。

矢内原は，国体明徴が声高に叫ばれる時代に対峙し，1937年に日本国家の在り方を「不義」と断罪したがために東京帝国大学を追われたキリスト者です。敗戦日本を前にした矢内原は，1945年11月の講演「平和国家論」(『日本精神と平和国家』1946年）で,「天皇は制度ではない。日本人の国民的感情の中心である，日本に於て，日本の国の事を一番本気に，一番真面目に，一番私心なく考へて，心配して行動せられたのは天皇御自身だ。本

当に陛下はお気の毒だ」「天皇に対する言ふに言はれない尊敬と愛着の気持は，封建的であるとか神話的であるとか浅薄な批評によつて片づけてしまふことの出来ないだけの，我々の民族意識の中に深く根をもつてゐる感情であると私は信じてをる。」となし，「2600 年」の歴史に誤差があるが，「2000 年の間皇室が続いて来たといふことは，人類歴史に於ける最も驚くべき事実」と「皇国」の歴史を讃歌し，敗戦国民を鼓舞し，「天皇と人民の関係は権力による服従関係だけでなく，いはば家族的関係」とも説き，日本人の生活だとみなしています。

この言説はシラス天皇に寄せる想いにほかなりません。まさに『帝国主義下の台湾』（1919 年）をはじめとする日本の植民地統治を分析批判した社会科学者矢内原忠雄は，「天皇の国」の子として，「天皇制」なる言説に批判的な眼をもつ一方で，国体の神聖を売り物とする時代の風潮に対峙して生きたのです。

このような天皇に向ける眼差しは，『ミカド』に通じるものですが，「天皇制」をある観念の表白とみなす国体明徴的な閉ざされた愛国心に対峙し，「天皇」「皇室」「帝室」等々で読みとる開かれた愛国心にうながされたものにほかなりません。そこには，国体明徴に馳せ行く時代のなかで，「天皇」「国号」問題に対峙することで己の愛国心を問い質してきた想いが読みとれます。

ここには，新渡戸に学んだ垂直的思惟への目で時代に向き合い，己の身体に棘として刺しつらぬかれたイエスの信仰に生きたキリスト者日本人たる我の証があります。まさに信仰を身につけて生きるとは，このような世界に向き合い，私が主語で己の場を確かめていくことではないでしょうか。しかし政治制度としての「天皇制」なる概念は，近代の日本型君主制に限定されることなく，「古代天皇制」等々，日本の歴史を貫く学問用語，社会科学の概念ともみなされたのです。

想うに「天皇制」は，その言説の登場にみられますように，日本が国民国家になるべく「文明」を取りこんでいくのと同伴し，天皇なる存在を政治的枠組に封じ込めることで成立してきたものです。いわば「文明」と「天

皇制」は，同時的に発生したもので，天皇をある種の記紀神話で潤色しておりますが,「日本」を母胎とした一卵性双生児ともいえる存在なのではないでしょうか。

おわるにあたり ── 歴史を問い質す心

私は歴史に向き合う時，その脳裡に想い浮かぶのは時代に対峙する己の心を詠ってきた斎藤史の歌です（『風翩翻 ── 歌集』2000年）。

> 記憶おほかたは勝者が残すものにして死者・死に等しきもの共に語らず

敗者の場から歴史をみつめないかぎり，時代が醸す空気は読めないのではないでしょうか。歴史は，シュテファン・ツヴァイクが語るように，敗者に背を向け，勝者を正しきものだとすることで描かれてきました。それだけに「靖国」だとか「忠魂碑」が紡ぎ出す世界は，単に「軍国主義」「侵略戦争」云々で短絡的に価値づける作法ではなく，そこに封じこめられた闇に向き合い，その呻きに耳を傾け，その声を聞き取り，現在を歴史として思い描いていくことが問われているのではないでしょうか。このことは死者にどれだけ寄り添って時代を思い描き歴史として造形できるかということでもあります。

山形県の生徒さんがいますよね，ムカサリ絵馬って聞いたことある？知っていますか？　大晦日の除夜の鐘でTVに登場してくる天童市の若松寺，若松観音がこのムカサリ絵馬の奉納を受け容れ，境内に絵馬堂があります。その前に立つと，何か迷路に迷い込んだような奇妙な感覚にとらわれた。

ムカサリ絵馬は,「ムカサリ」迎えられのことで婚礼を意味し，子どもが死ぬと，この子が生きているとこのような結婚式ができただろうにと，花婿さんと花嫁さんの姿を画いた婚礼絵馬のこと。そこには，死んだ娘，あ

るいは息子の成長した顔で，理想的とみなされる相手の姿を寄り添わせ，幸福な新婚家庭が描かれています。このような作法，死んだ子の幸せを祈願する心の営みは，冥界結婚，死後結婚，「冥婚」といわれるもので，ラテンアメリカの原住民にもみることができるそうです。

山形県には，このような風習が広くみられたようで，最上川筋の最上三十三観音霊場を訪れた際，その一つに特攻で戦死した息子の写真が掲げられており，それに「何歳何処で死にました，どなたかこの子のお嫁さんになって下さい」，と書き添えてありました。この母の想い，「ムカサリ絵馬」に寄せる父母の祈念を受けとめて歴史が描けるかどうかが問われているのではないでしょうか。これが一人の歴史家としての私が負わねばならない課題かな。

想うに戦後の歴史学は，敗戦を一義的に断罪するに急で，闇にひそみ含恥をおびて佇むミューズクレイオの歎きに耳をかたむけることはありませんでした。このことは，明治国家が造形した「国の物語」を断罪し，否定するのみで，新しい「国の物語」を描き出すことができないままに現在があるということではないでしょうか。

そこには，天皇ヒロヒトが説いた「平和国家」像を問い質すこともなく，「平和国家」を言あげし，日本国憲法第９条を神格化して生きる作法に埋没してきた姿が読みとれます。この在り方こそは，「美しい国日本」なる言説に対峙しうる歴史像を提示できないまま，状況に流され行く虚ろな世界を日常化したのだといえましょう。いわば戦後の日本で何かと目にする「市民」なる存在は，憲法第９条を主語としてでしか己の場をかたり出せないがために，時代社会に対峙する存在となりえないのではないでしょうか。

たしかに第９条に寄り添うことで日本国憲法を死守するといわんばかりの「市民」の雄叫びを聞くものの，第１条「天皇は，日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であって，この地位は，主権の存する日本国民の総意に基く」にどのよう向き合うかは語られていません。「天皇制」云々で「天皇」という存在を問い質すなら，第１条に向あって私の場を確かめることがいるのではないでしょうか。

かく問う己の場を読み取るには，国立国会図書館法前文「国立国会図書館は，真理がわれらを自由にするという確信に立って，憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として，ここに設立される。」，にある「真理がわれらを自由にする」なる文言が提示した「真理」への目が問われているのではないでしょうか。この文言は，「ヨハネによる福音書」8章32節「真理はあなたたちを自由にする」を借用したもので，国立国会図書館のメーンカウンターの壁に日本語とギリシャ語で刻まれており，ギリシャ語は聖書の文言です。この聖句は，欧米では大学の講堂，図書館などに刻まれているようです。

内村鑑三は，この聖句がジョンズ・ホプキンス大学の大講堂入口のアーチに刻まれているのを目にしたときの感慨を,「真理と自由」(『聖書之研究』284号，1924年3月）で紹介しています。真理というのはイエスであり，光であり，神です。しかし日本では「真理」をギリシャ的に「知識」とみなしがちです。しかし「真理」は，内村が説くように，聖書の真理,「イエス」「光」「神」，絶対的なるものではないでしょうか。人間は,「知識」がいかにあろうとも，自由になれないのです。むしろ「知識」の囚人となり，己の場を見失い亡びに馳せ行くだけの存在にすぎません。

私は,「真理はあなたたちを自由にする」との問いかけに向き合うとき，内的自由と外的自由があることに気づかされます。内的自由とは，見えざる大いなるものに向き合い，私を位置付けるなかで手にし得る世界です。その世界は,「体を殺しても，魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ,魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」(マタイ10･28）というメッセージが説き聞かせた言葉に読みとれます。この言葉こそは,「愛国心」が問われるとき，国家に対峙する私の場を確かめる器となるものではないでしょうか。この内的自由なくして外的自由は在りえません。

しかし世間では，外的自由を価値あるものとみなし,「真理」に結び付いた内的自由に目が及びません。国家に対峙し，己の場を確かなものにし得る目は内的自由です。それだけに，この真理に向き合うなかで日本の在り

方を問い質し，「日本の国」という物語を私が主語で語り出すことが求められてるのではないでしょうか。

私は，日本をこのように読み取り，世界を思い描いていくのだという作業をなすことが歴史を学ぶ者に課せられているのだと思い，現在があります。歴史は，暗記モノではなく，最高の知的作業，私の世界を，私の存在をかけて問い質していく営みなのです。

どうか歴史を読み解くとき，「天皇制」だとか，「国家神道」だとか，ある観念に引き寄せて割り切り，断罪するのではなく，そこに己の場を見出した心の在り方とは何かに想い致し，そのような心に向き合い，私が主語で問い返し，己が思い描く世界を提示してください。この方途は，主語が私でかたる世界，「天皇制」をはじめ，「フェミニズム」等々の時代に流行している「概念」なるものの枠組みを鋳型にして語り出す歴史像が広く世の習いだけに，私が主語で時代を，歴史を説く作業に困惑することもあるでしょう。しかし私が主語であるからこそ真理に向き合えるのではないでしょうか。

大ざっぱな話になり，慌ただしく話しましたが，これで終わります。

〔附記〕

本稿は，2015 年 2 月 11 日に山形県小国の基督教独立学園高等学校における「「思想・良心・信教の自由」を守る日」の全学授業でした講演に加筆したものであることを申し添えます。